新撰地理小志

山田行元編

亨

大日本教育會書籍館
第六室
二函 九架 號 二冊

特31
535

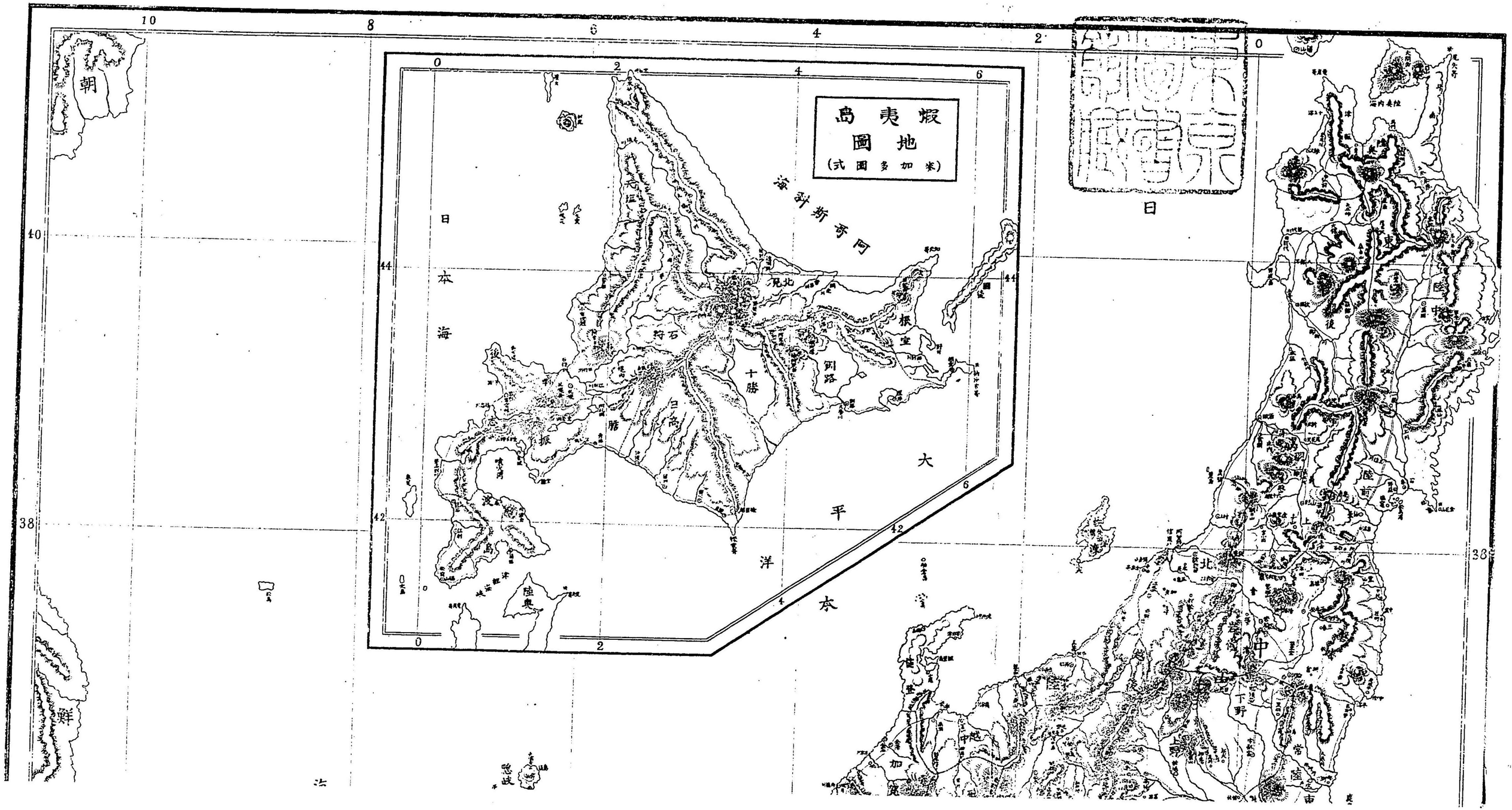
山田行元編

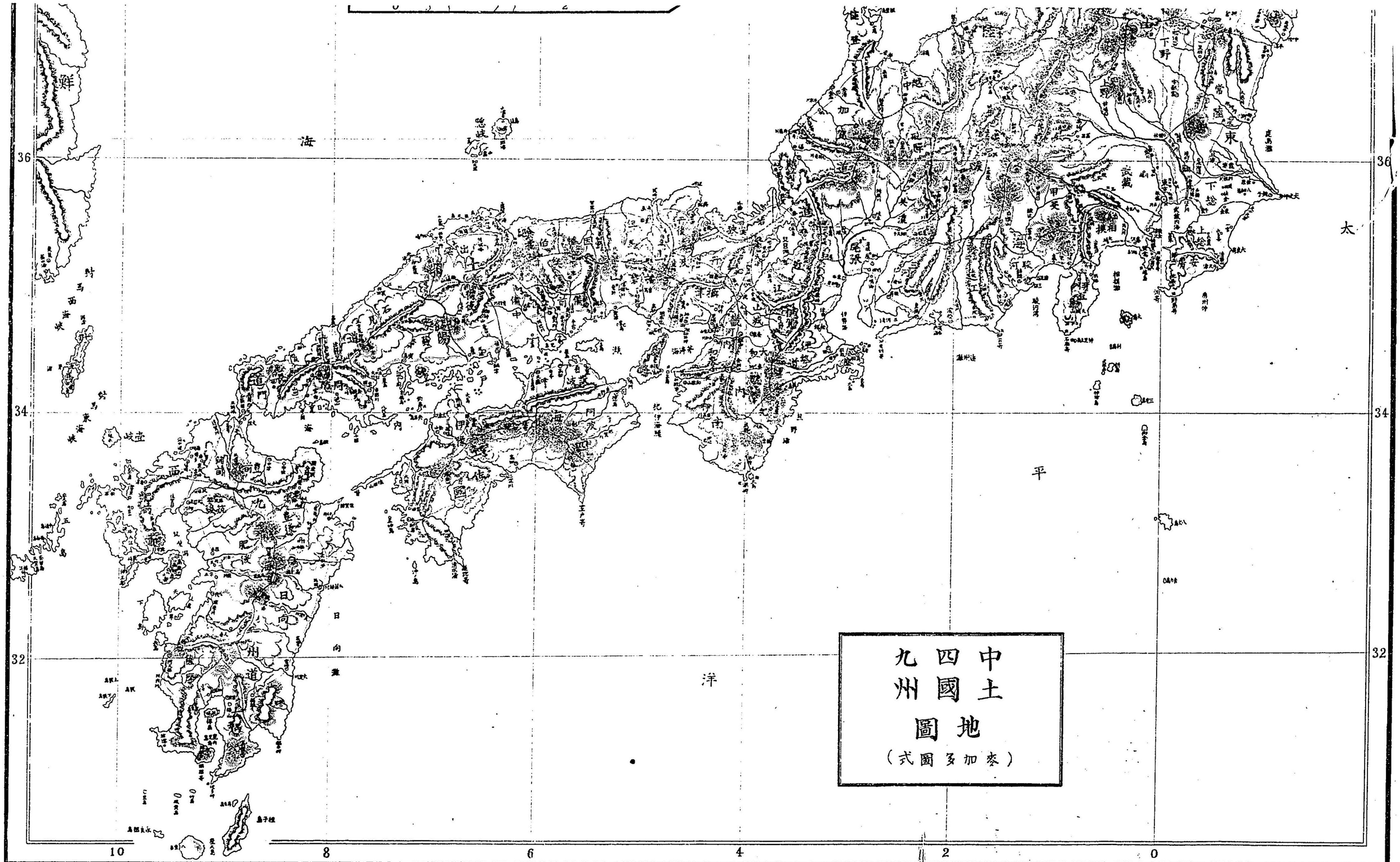
新撰地理小志

亨卷

香風館藏版

定價金貳拾五錢


蝦夷島
地圖
(米加多國式)
朝
鮮
日
本
海
大
平
洋
オホツク海
北見
根室
釧路
十勝
石狩
日高
胆振
渡島
陸奥
日
東
北
陸
中
陸
前
上
下野
常
陸
越
中
加
賀


中四九
土國州
地圖
（麥加多圖式）
朝鮮
海
太
平
洋
36
34
32
10
8
6
4
2
0

特31
535

新撰地理小志卷二

第八章 日本志の續

山田行元 編

畿内

畿内とは、山城、大和、河内、和泉、及攝津の五州なり。故に、五畿内とも稱ふ。山城は、畿内の北部にあり。其南に大和とあり。大和の西より、河内あり。又其西は、和泉にして。攝津は、山城、河内の西に連なり。*

此五州の中、大和は境域最廣く。攝津これに次ぎ。河内、和泉に狹しとあり。攝津、和泉の二州は、淡路島と相對して、一の内海を抱くに、きと茅渟の海と云ふ。内海とは、

*位置境界の如きは地圖に據りて指教せよ

海水陸地の間より、入り込みたる處の名なり。

地勢は、東の方、東海道の界より、重疊たる山嶺なり。是北陸、東山の二道を横ぎりて、此より接ける大嶺よりして。大和の南部より簇り聳え國見山、大臺原山、大峯等の大岳となり。其横嶺縱横より支き蔓りて、南海道の一州なる紀伊より亙る。西北の方、山陰、山陽の界ふも、亦數多の山嶺なり。山城の比叡山、河内の金剛山は、畿内中にて名高き山なり。

此等の山嶺の間は、平野頗廣く。淀川、大和川流れて、地味大抵皆肥えたり。中より、淀川は、琵琶の湖の下流ふる宇治川、及賀茂桂木津三川の流を會せたる大河より

して、舟の運漕甚便なり。吉野川は、大和の南部の山間を、流るゝ水より、別れて紀伊より下る。氣候は、概中和なるも、縱令極寒より至るとも、寒暖計時にして、冰點より下るまゝなるより過ぎざる。

産物は、山城の茶、西陣織の名を得たる錦、縮緬、金襴、綴子、羽二重等の織物、清水焼と稱ふる、清雅なる陶器、攝津の酒を第一とし。山城、攝津の石材、奈良の晒布、大和河内の木綿等これより亞ぐ。穀物は、我國より、北海道を除くの外は、産せざる所なり。

畿内は、前にも説きたるが如く、神武天皇の橿原を始として、歴代の帝都、概此所より在るべ、名所古跡も、亦隨

ひて多し。汝他日時を得ば、宜しく畿内を遊ふべし。汝ぞ心を愉ましめて、智識を啓くべし、實に多こゝん。

山城に至きゞ賀茂の清き流に沿ひて、京都と名づく。

*通常世人の為に要用ふる地理學に山岳河湖の位置等の角等を知るまでらぐして道路の難易都會名所等を知るなり。況や山河の位置方角の如きは地図上一目瞭然たるをや故に此書は特に各地の旅況を解論せるのみ

*る大都會なり。是、延暦以降の帝都にして、人口甚多く、街衢家屋皆清潔なり。賀茂川の東には、一帶の丘陵なりて、東山と稱へ、壯麗なる寺院、幽邃なる林泉多し。西山にも、亦櫻を以て名高き嵐山、紅葉の名所なる高雄等なりて、勝景の地少からず。汝始めて、京都に至らば、其寺院の壯なるに驚き、風景の淑きと、風俗の閑なるとを愛するなこん。京都より、南の方數里にして、伏水なり、亦一の名邑なり。

大和の北境に入きゞ、奈良と稱ふる所なり。是も亦、昔の帝都にして、今に一の都會を成す。東大寺には、名高き大佛なり、春日の社地は、風光清雅にして、愛きゞべし、皆此地の名所なり。吉野山は、奈良の南十里許にあり。吉野川の南に當きる、長き嶺なり。櫻花の為に、其名世に著き、又南朝三代の皇居ふ

奈良大佛

るゝ由うて、古跡多し。大和ハ、此外ふも、尚名勝多きを以て、諸國の人来り遊ぶ者多し、ふきを大和巡と云ふ。大和より河内ゝ入るゝハ、金剛山より支きたる、山坂を踰ゆるなり。金剛山ハ、南朝の時、名を轟したる、楠正成の、據りて、北條氏八十萬の軍を破りし所なり。汝此山ゝ登らバ、今尚其城址を見るゝことを得可し。

和泉ゝ至きバ、堺と名づくる所なり。即、和泉と攝津の堺ゝなる名邑なり。其北の方三里餘の處ゝ、大坂なり。攝津の大坂ハ、淀川の流ゝ沿ひたる、大都會にして、人口京都よりも多く、通商甚盛なり。大坂城ハ、豊臣太閤の築きし所ゝして、昔ハ要害雙びなき堅固の城と稱へたり。

大坂の西八里許ゝ、神戸と名づくる港なり。街衢ハ、兵庫と連りて、繁盛の都會なり。神戸ハ、外國と貿易を通ぜる所なり。近年神戸より大坂京都を經て、東山道ふる、近江の大津ゝ達する、轍道を築きたきバ、旅人の往復、物貨の運送、大ゝ便宜を得たり。轍道とハ、滊車の轍を通ぜる鐵の路なり。

兵庫、神戸の間ゝ、湊川なり。楠正成の戰死せし所ゝよして、其名高し。是より北三里許ゝ、有馬の温泉なり。

攝津の西境の海邊ゝ、須磨の浦と名づくる所なり。古より風景好きを以て著る。又、此處ゝ、一谷、鵯越等の古

跡なり。一谷の戰の物語は、意ふは汝おきを聞きしおとならん。

第九章日本志の續

東海道

東海道の名義及位置は、汝尚善くおきを記憶せるならん。此地方は、畿内と共は、我邦の重要ふるところふきば、余は、汝の特は意を著けて、此志を學ぶんおとを望むなり。東海道は、十五の州なり。即、西の隅の一州を伊賀とし、伊勢、志摩、尾張、三河、遠江、駿河、甲斐、伊豆、相模、武藏、安房、上總、下總、常陸、其東は連り、長大略百四十里は及ぶなり。

此十五州の中は、伊賀と甲斐とを除きて、他の十三州は、皆海は沿へること、汝地圖はそこをを見ん。即伊勢と尾張は、伊勢の海と稱ふる内海を擁を志摩は一の山嘴をなして、伊勢の巽の方より、外洋は突出を。此伊勢の海は、汝は語るべき一奇事なり。即、蜃氣樓とて、春夏の交、海上は城市、樹林又は人馬の往來をる樣ふぐ朦朧として、現を出づ

ることなり。土地の人は、これを伊勢の大神宮、尾張の熱田と、行幸し給ふと云へり。是甚怪しき事の如くなれども、決して小説と説く幽靈等の如き、虚談と非ず、汝他日、地文學、或物理學を學ぶ、容易く其理を知ることを得ん。

又、尾張と三河の間とは、三河灣なり。遠江は、遠州灘と稱ふる大海と向ひ、駿河は、南海と突き出でたる、伊豆半島と相對して、駿河灣を擁く。駿河灣の北部は、清見潟の稱なり。其岸とは、三保松原、久能山、薩埵山等なりて、風光尤好し。灣とは、海水の弓形と、陸地と入り込みたる所の名とて、灘とは、潮氷の流速き處を云ふなり。

相摸の南にも、亦相摸灘と稱ふる大海なり。相摸の三浦山嘴は、房總半島と相對して、武藏の内海を抱き、房總及常陸は、東海の波濤を受け、其海は、處によりて、房州沖、鹿島灘等の稱なり。沿海の形勢、大略斯の如し。

地面の大勢を論ずる時は、伊賀の一州は、四方山を圍まれ、谷間僅に平地なるのみなり。殊に、此州は、東に大嶺を負ひたるに由り、川流皆西に流れて、畿内に入り、地勢は、東海道と隔絶せり。

伊勢は、海濱平野遠く開けたれども、内部には、東山道なる飛驒、美濃の西境より續きたる、大嶺なりて、數多

の高峯となる。志摩は、其横嶺の、海中より突き出でたる所より、何處も山嶺ふしぐるいなり。海岸も、亦斷崖險しくして、海上より島嶼多し。これを志摩山嘴の碎片とも稱ふべし。此横嶺中より、朝熊山と名づくる、名高き山なり。

尾張は、地勢大なる開け、廣野美濃より彌う、木曾と名つくる大川なりて、此間を流る。木曾は、其流大なりて、運漕の便なり。三河、及遠江は、内部より、東山道より亙り来る、駒岳の山脈、及東山脈と稱ふる大嶺なりて、山岳各處より簇り聳ゆれども、山脈の間を流るゝ、矢作川、豐川、天龍川等の沿岸より、海邊より連りて、平野多し。秋葉山は、遠江より在りて、世より知らるる名山なり。

駿河の西部より、東山脈の横嶺なりて、大井川、安倍川此間を流れ、河邊より稍平地なり。東部より、名高き富士山なり、高さ一萬四千尺餘なりて、數十里を隔てたる所より能く見え、夏も亦巔の雪消ゆることなし。然らば、汝は地面の高き程、寒氣の烈しきことを知らん。富士山の趾は、廣漠なる草野をふまして、海濱より連り、富士川其西を流れ。又富士山の前より、愛鷹山と名づくる一峯なり。

甲斐は、富士川の上流なる一大谷なりて、四方より山嶺繞り圍み、金峯、八岳、白根なども稱ふる高峯なり。金峰山

の某の處にて、人若大聲を發すれば、聲を連ねて其如く答ふる者あり。是啥呀あり。土地の人は其理を知らざれば、山丈（やまおとこ）なりて、人を呼ぶと思ふあり。然れども、汝も、亦幸に余が此話を聽くにあらざれば土地の人と共に、誤りて山丈の怪と認むるなるべし。

甲斐と相模の間には、東山脈より支出たる嶺なりて。甲斐には、天目山と為り。相模には、大山箱根と為る脈中より流を出づる大川を、馬入川と名づく。其山嶺は更に遠く、伊豆半島に亙りて、天城山と為り、海に迫る。其極端を石廊崎と云ふ。崎、及岬は、地理學の語にて、海中に突き出でたる陸地の盡くる處をいふ。伊豆の海上には、尚伊豆七島と稱へらるゝ大島、利島、新島、式根島、神津島、三宅島、御倉島、又は八丈島等なり。小笠原島は、其南の方百八十里の洋中に位す。昔、小笠原貞頼と云ふ者の見出だす所なり。相模の東部も、亦丘陵波浪狀をなして、平地少し。

武藏、上總、下總、及常陸は、地勢平坦にして、東山道の上野、下野地方に連り、一大平野を成して、利根と名づくる大川此間を流る。我輩は、或は稱へて坂東の平野と言ふ。是、相模、武藏、安房、上總、下總、常陸、及上野、下野、八州の地を、坂東、又は關東と呼ぶに由りてなり。然れども、武藏の西部は、秩父山なり。常陸の西北境は、筑波一

帶の嶺なり。上總の南境より、安房より亙りて、鹿野清澄等の一簇の山なることゝ、汝地圖上にてこれを見ん。

利根は、我邦の大川にして、長さ七十餘里に及び。坂東第一の巨流なれば、坂東太郎と稱へらる。此川は、關宿と名づくる所より至りて、兩派に分れ。本流は、東に下り、常陸の霞浦と名づくる、大湖の水を併せて、外洋に注ぎ。分流は、南に下りて、内海に入る、これを江戸川といふ。此川は、小瀛船の通ふ所は、三十餘里の間に過ぎざれども。小舟は、尚遥に上流に泝ることを得可し。其他、天然の形勢即山川岬灣等は、汝地圖に就きて、精しくおもむきを學ぶべし。*

*教師適當の疑問を下して學生をして地圖を查閱せしめ更に暗射圖を用ゐて其記臆を鞏固ならしむることを要す

東海道は、其地勢前に說けるが如く、北に山を負ひ、南に海を受くるに由りて、氣候概中和に屬し。沿海及沿河の平地は、地味肥えて、産物饒かなり。

産物は、伊勢の萬古燒、形紙津縞子、茶。尾張の瀨戸燒、七寶燒、鳴海絞、濱大根、名古屋扇。三河の木綿、石材。遠江の茶、材木、石腦油、椎茸。駿河の駿府細工、半紙、安倍茶。甲斐の郡内絹織物、水晶、梓、葡萄。伊豆の鴈皮紙、材木。八丈の八丈絹。相模の榛引細工、貝細工、石材。武藏の秩父、八王子の織物、川口の鑄物、狹山の茶、淺草海苔。安房の房州沙。上總の茶、紅花。下總の結城木綿、紬織、銚子縮、野田醬

油流山味醂行德鹽佐倉炭常陸の紙類礦屬水戸の銅器等を第一とし。海よ沿へる地方へ漁の利夥しく。九十九里濱鹿島浦の鰯殊よ盛あり。又東京へ我邦通商の中心よりて、商業甚盛あれば、内外の産物有らざるもの無く。且金銀銅象牙鼈甲塗物等の、精巧なる製造品を出だす。

東京へ武藏の海濱の、廣坦なる平野の間よ、開きたる大都會よりて。南へ武藏の内海よ枕み。隅田川よ跨り。江戸川を帶び。運輸極めて便あれば。人煙の繁盛なること、東洋第一なり。是即我日本の首府よりて、皇居及大政府皆此地よ在り學校、醫院、商會等の壯麗なる者多く。行人の街上よ絡繹たるまた、何時も祭の日の如く。馬車、人車の行き通ふ音へ、時なるぬ雷と聞かと疑まれ。夜へ無數の街燈を點じて、明なること晝を欺き。田舍人の、始めて此地よ來る者へ、魂褫まれ、目眩むよ至る。然るよ、汝是くの如き大都會も、三百年前までへ、

武藏野くて、物寥しき荒野なりしことを聽うべ、又更に驚こゝん。此府は、實に、天正の末年に、德川家康と云ふ人の、創建せし所なり。

市街の北の端を、板橋といふ。東山道の西部を過ぎて、京都に出づる、中仙道の驛口なり。東北の端を、千住といふ、奥羽街道の驛口なり。西南の端を、品川といふ、東海道の驛口なり。余は今汝が為に、東海道旅行の手引をなさん。

汝東海道に就きて、西に進まば、路程八里許にして、横濱と名づくる港に達らん。然るに、東京と横濱の間には、近来轍道を築きたるまゝ、汝東京より氣車に乘りて行くべ、一時あらずして、横濱に達ることを得ん。

横濱は、外國人と貿易をなす港なるまゝ、外國人の此地に居留せる者多く、市街清潔にして、美麗なり。外國貿易の為に開きたる港は、此外四箇所ありとゞも、此港の如く盛なる者なし。港とは、船の碇泊に便りよく、商賈の集ひ湊まる所を云ふなり。

汝横濱より、支路に就きて、海濱を旅せば、金澤、横須賀、鎌倉、江島等の名所を過ぐるなるべん。横須賀は、盛大なる造船場の在る所、鎌倉は、昔の大都會の跡にして、金澤、江島は、風光に富み、風流人、好古家の常に遊歷せる所なり。

是より再東海道と合ひて進まば、小田原といふ名邑と達らん。是より前は、世と聞えたる箱根峠にして、山路上下八里なり、路嶮ゑくして、車を通ぜず。故と徒と て行くこと能はざる者は、皆駕籠と乗りて、此處を過ぐるなり。頂と登り詰むれば、箱の如き凹ある處なりて、中と箱根驛を設く。此邊は、蘆の湖、水深くして清く、二子山、峯高くして峭しく、風景愛す可し。湖の下流ある、早川の岸と、七所の温泉なり、これを箱根の七湯と名つく。箱根驛、及七湯は、山間と在りて、氣候涼しければ、夏時は、東京人等の、来りて暑を避くる者多し。

伊豆とは、別と汝と語る可き程の都會ふし唯州の南の端なる下田港は、曾て外國人の為と、開きし港ある と申りて名なり。東海岸の熱海も、名高き温泉あり。

汝箱根を下りて、駿河と入らば、浮島原を過ぎ、清見潟と沿ひて行くならん。此邊は東海道中の風光の勝地にして、富士山の、夕日と映じて、紫雲鬱き、伊豆の山々、翠帯を引けるが如く、三保の松原、煙波と相映ずるさまなど、いと面白く、旅の鬱を忘るるべし。尚進めば、靜岡と至らん、是東海道中屈指の都會にして、駿府細工の産所あり。

富士川の上流と、甲斐の一州なるとは、既と汝と語きり。此州とは、甲府といふ繁華の邑なり。然を

ども、東京より此州を行くは、東海道よりも甲州街道を順路とす。

東海道は、駿河より遠江を出づる間は、宇都谷峠、日坂等の山坂なれども、路甚嶮しからず。汝天龍川を渡りて、西へ進まば、濱松に至らん、是遠江にて名高き邑あり。天龍川、及駿河の富士川、大井川は、迅流にして、河道甚廣く、昔は舟、或は蓮臺にて河を渡し、旅人の艱み少うゝざりしが、今は皆橋を架けて、往來に便りせり。

遠江の西境に近き所に濱名の内海あり。其入口なる、今切の渡は、船路一里餘あり、然れども、近来は濱松より支路に入り、瀉船にて、此内海を渡る便路を開けり。

三河に至らば、汝は矢作川の東岸に、岡崎といふ一大邑なりと見ん、此地は、徳川家康が興りし所なり。

尾張の境に入らば、汝は桶狹間の古戰場を過ぐるならん。此地は、今川義元が戰死せし所にして、今一片の墓碑を遺せり。名古屋に至らば、市街壯麗にして、人口多く、其水陸運輸の便を占むること、恰東京と相類し、商業頗盛なりと見ん。是我邦にて、兩京、大坂に亞ぐべき大都會なり。

名古屋の南に接ける一邑を、熱田といふ、名高き熱田神宮の在る所なり。此處は、即伊勢の桑名への渡よし

て、船路七里なり、海きを間遠の渡と稱ふまども、尾張伊勢の海山の風景、船中より居ながら、眺めやりて、雙眸ひまなく、間遠ありとい覺えず。然るに、東海道は、熱田より福田、前須を經て、舟すて木曾川を下り、桑名に至ると本道とあり。風吹き、浪荒るゝ時は、汝空しく此道に從ふべし。

東海道は、桑名より、海に沿ひて、南に進み、四日市に至り、是より内地に入りて、鈴鹿峠の山路を越え、近江を過ぎて、京都に入る。道程、凡百三十一里あり。此間に、五十三驛なりと稱ふ。

汝若東海道を離れ、伊勢の海濱に沿ひて、南に行くば、安濃津に到るあらん。是伊勢第一の繁華の邑なり。尚南に進まば、宇治、及山田に達らん。此地は、伊勢大神宮の在る所にして、賽者四方より集ひ湊まる伊勢參宮と唱ふる者是なり。志摩なる、鳥羽と名づくる一つの港なり。人口多、のゝぐれども、風帆船の多く碇泊する所あるを以て、繁盛なり。

東京より東の諸州に、汝に語るべき都邑、及勝區少なし。唯下總の銚子は、利根川の河口に當り、常陸の水戸は、元大藩の城下なるを以て、繁華なり。下總の國府臺の古城址、成田の不動堂も、亦世に名あり。

東京より水戸に至る路を、水戸街道と稱へ、水戸より

東山道ある、磐城の海濱を過ぎ、陸前より出づる路を、濱街道と稱ふ。常陸と磐城の界より、濱街道の古道ある、名古曽の關の址なり。源義家の「吹く風を、なこそのの關と、思へども、道もせゝに散る、山櫻かな。」の歌、世人の傳へ誦する所あり。

第十章　日本志の續

東山道

今余が語らんと欲する所、東山道の地理あり。東山道の西部、東海道と北陸道の、内部に在る地方にして、山嶺多し。これを中仙道と稱へ、中に、近江、美濃、飛騨、信濃、上野、下野の六州なり。東山道の東北部、元陸奥、出羽二州の地なり。因りて、これを奥羽地方とも稱ふ。三面は海を繞らし、内部は、高くして嶮しき山嶺なり。今、此地方を、岩代、磐城、陸前、陸中、陸奥、羽前、羽後の七州に分てり。然らば、汝、東山道は、十三の州なることを知らん。余、尚中仙道と、奥羽の大區別を以て、其地勢を汝に語らんとす。

中仙道　汝地圖に就きて見よ、何故に、中仙道の河、皆四面に流れ下るや。汝熟、其形勢を察せば、中仙道の地勢、勝れて東海、北陸の地方よりも、高きことを知らん。

中仙道は、三つの大山脈なり。其信濃と飛騨の界は

在る者は、中央山脈と稱へ。高地の間の、重疊たる山嶺ふゝて、御岳、乘鞍、立山、戸隱の諸高山なり。山脈延びて、北陸道の越後に亙る。中にも、御岳は、富士山に竝ぶ可き高山にして、峯に積まる雪は、夏尚消えず。暑熱の候、月光雪に映ずる景色、いと珍らし。其飛驒、美濃の西に在る者は、西山脈と稱へ。美濃に秀でゝ、大日岳と為す。近江に拔でゝ、伊吹山と為る。此山脈の北に亙る者は、北陸道を横截る。南に赴く者は、大和の東南部より、紀伊に蔓る。其信濃の東境に在る者は、東山脈ふゝて、信濃に秀でゝ、淺間山と為す。上野にて、妙義、榛名の二つの横嶺を出し。本脈は、上野の西北の隅にて、奥羽地方の二つの大山脈に連る。此間より、利根の一大川を發す。東山脈の甲斐の界に在りて、金峯、白根等の高峰とふ[illegible]、既に[illegible]れを汝に語まる。

然るに、此三つの大山脈は、信濃と飛驒の、中央に亙る横嶺なりて、相連る。信濃、神通、射水川と、天龍、木曾、飛驒川との分水嶺をなす。又木曾川と天龍川の間に、一つの山嶺なり。信濃に、駒岳と為す。美濃に、恵那岳と為る。奥羽地方の山脈、上野、及下野に亙る者も、亦赤城、日光、那須の諸高山を為せり。

故に、信濃、飛驒の二州は、何處も山嶺ふらぎるに無く。氣候陰寒なり。然れども、信濃の北部なる、信濃川の谷

は、沃野頗廣し。

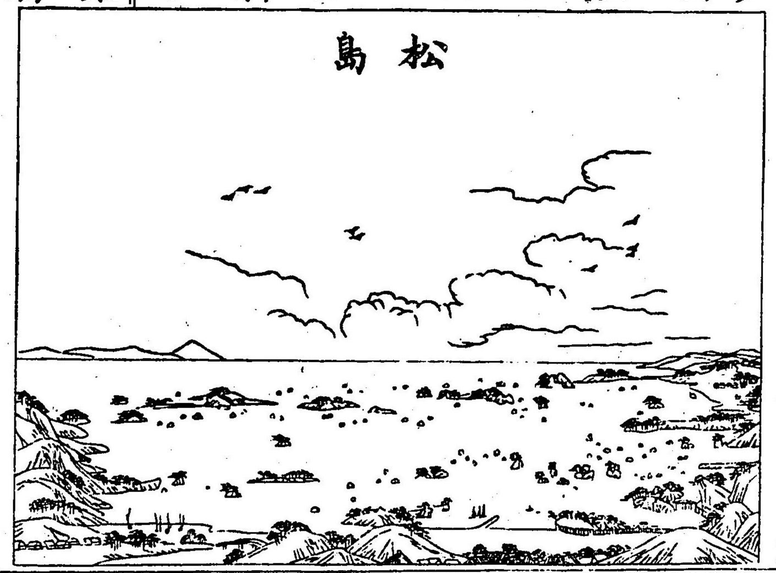
美濃は、東北、西の三面は、山を繞らせども。中央より南は彌う、地勢大に開けて。木曾川、及其濃流、此地を流る。近江は、西山脈、及其横嶺と、中國より續ける山嶺にて、殆四境を繞う圍み。中間は、一大湖を湛ゆ。是所謂琵琶の湖にして、周囲七十三里餘にて。下流は、瀬田川と為う、山城に下る。湖の中は、竹生島といふ奇景の岩石島にて。湖の濱は、平野多し。此二州は、氣候中和にして。地味肥えたり。

上野、及下野は、各北境は山を負ひたれども。南は、平野甚廣く、利根川及其濃流、此地を潤ひ。是即、坂東の平野の一部にして、地味佳けれども、氣候は武藏下總よりも寒し。

奥羽　奥羽の地は、三面は海を繞らせども、其海岸は、東海道の如く、甚しき出入なること無く。唯陸前は牡鹿の半島、突き出でて、松島灣をなし。陸奥は、斗南の半島、津輕の山嘴突き出でて、陸奥の内海をなすに過ぎず。松島灣の西浦には、一群の小島にて。其島は、悉松を生じ。歌たる者は、天を指さし。俯す者は、波に匍匐ひ。風景の佳きこと、言辭に盡し難し。是即、日本三景の第一と稱へらるゝ、松島にして、灣の名も是より出でたる。又牡鹿半島の東に、金華山とて、海上に抜き出でたる、

孤峯なり。全山岩石より成りて、沙礫に至るまで、金色を帯ぶ。然れども、汝此山を以て、全く金より成れる者と思ふ事勿れ。

奥羽地方の、二つの大山脈は、一を、奥羽山脈と稱へ、上野、下野より、岩代の中央を横截る。是より、磐城陸前陸中と、兩羽の界



を限りて、北に延び終る、陸奥の中央を横截りて、海に迫る。此山脈の中に、赤城、日光、那須を始とし、岩代の安達太郎山（一名二本松岳）、磐城の藏王岳、陸前の泉岳、栗駒岳、陸中の御駒岳、岩就山、陸奥の界に聳えたる八甲田山等の高峯なり。太平山、岩木山の横嶺も、亦此山脈より支を出でたる者なり。一は、羽越山脈と稱へ、北陸道ふる越後の東境より、羽前、羽後の中央に亙る。越後の守門岳、岩代の御神樂岳、飯豊山、羽前の朝日山、湯殿山、月山、羽黒山、羽後の鳥海山は、此山脈の間に聳えたる高峯なり。

然るに、此二つの大山脈は、羽前の大嶺、虚空藏山、及羽

後の院内嶺の山頸よて、相連り、會津、米澤、最上の三大谷を包む。谷間ハ、地味極めて肥えたり。山頸とハ二つの山脈を連ぬる所の山を云ふ。

又磐城〻三陸の海濱ヨ、各一帶の山嶺なり。其磐城ヨ亙まる者ハ、常陸の筑波山ヨ連りたる、長き嶺にして、八溝山、關伽井岳、靈山等の高峯を為ス。三陸ヨ亙れる山嶺の中ヨハ、早池峯、名久井岳、六角牛山等の高峰あり。横嶺直ヨ海ヨ迫りて、崖高く、海深し。汝空しく記をべし、海濱ヨ高山なれば、其海必急ヨ深く、海濱平坦ふきば、其海必遠淺ふるあとを。此他、半南半島ふも、亦獨立せる群山なりて。恐山高く其間ヨ聳えたり。

山脈の形勢是の如くあるこゞ故ヨ、岩代ハ、地勢自東西の二部ヨ分きたり。即西部ハ、會津の一大谷にして。四方の山々より、流を出づる水ハ、皆平野の中央ヨ集り。相會ひて、會津川と為り。羽越山脈を穿ちて、越後ヨ下る。東部ハ、奥羽山脈と、磐城の海濱山脈との間の、平野ふして。阿武隈の一大川なりて、此地を流る。磐城ハ、阿武隈川の沿岸、及海濱ヨ、僅ヨ平野を遺せるのみ。陸前ハ、海濱より、北上川の岸ヨ沿ひて、廣濶ふる平野なり。陸中の北上川の谷も、亦平野甚廣し。而して、此阿武隈川、北上川の谷ハ、遥ヨ相連り。平野の長さ、七八十里に及び。地味極めて肥えたり。陸奥ハ、東海の濱ヨ、平遠な

る原野なり。三本木原最大なり。西部の岩木川の谷も、平野頗廣し。

羽前は、地勢分きて、三部と為る。即内地よは、米澤、最上の二大谷なり。海濱まて、庄内の平野をあり。此三つの平野は、最上川と其濕流の、縱横よ流を通る所よりて。地味肥え、産物多し。羽後も、亦地勢三部よ分る。子吉川、御物川、能代川の平野是なり。奥羽地方の天然の形勢は、大略是の如し。

前よ汝よ語るゞ如く、奥羽の地よは、長江、大岳、廣野多く。處々ふ、盛なる産業を營む可きの、良地を存すれども。人口寡くして、土地未闢けざるは、真よ惜むべし。奥羽の地よは、實よ、造化主の蓄へ置けゝ、財寶多し。汝何ぞ、往きてこれを取らざる。

然るよ奥羽の地は、汝ゞ知る如く、中土の最北よ位するよ因りて、寒氣甚強く。冬の間は、平地も、雪積もること、四五尺よ及ぶ處なり。窓戸は、雪よ鎖さを、山地は行旅を通ぜざること、屢ゝこれなり。豈驚く可きにあらずや。然れども、此雪は、却りて居民の為めよ、大なる利益を與ふる者にて。雪舟と名づくる器械よ、物貨を載せて、雪の上を牽けば、能く一人よて、二馬よ劣らざる働を為し得可く。此よ臺を附くる時は、馬車、人車よ代へ用ふべし。又雪中は、田野の間の、小川の如きも、一面

の平地と為り。運輸行旅の為め、大なる便利なるなり。殊に、雪を積みて、坂を造り。雪舟をて、これを辷り落ち。或い、水面に凍り詰めたる、氷上を辷る遊あそびい。汝兒童に在りては、何如をぞり、愉快ならん。

産物い、近江より茶、晒布、縮緬、蚊帳等を出し。人い、商賈に長けたり。美濃に、世に知られたる美濃紙なり。又、生絲、織物、礦屬を産す。飛騨信濃い深山多きを以て、材木を出す。中にも、木曾の山林に、良材甚多く。木曾川を流して、尾張に輸し。四方に販賣をるなり、甚盛なり。信濃よりい、尚生絲、織物、石脳油、蕎麥を出す。上野い、蠶桑の地にして、盛に、生絲、諸織物を出し。富岡の製絲場い、其名全國に轟く。下野も亦蠶織の業盛にして、兼ねて苧、麻等の産なり。

岩代にてい、會津の陶器、漆器、蠟伊達信夫の生絲、蠶種を名産と為し。磐城い、牧馬、及漁の利なり。陸前の埋木、海參、生絲、仙臺平、陸中の生絲、南部縮緬、山慈姑、陸奥の材木、大口魚皆名なり。又陸中、陸奥の二州より、盛に牛、馬を出す。羽前い、米澤の生絲、糸織、青苧、最上の紅花、庄内の織物を、第一の産物と為し。羽後い、材木、能代塗物に名なり。秋田蕗い、其大なるを以て著いる。此外、奥羽の地い、米穀に富み、礦山多し。岩代の半田の銀山、陸中の尾去澤の銅山、最名なり。

余ハ是より、東山道の都邑、名所ニ就きて、其概略を語らんとす。近江の琵琶湖の、南ニ極まる邊ニ、大津といふ港あり。東海道の一驛ニして、京都を距ること二里半餘あり。湖上ニハ常ニ氣船を浮べて、此地より、彦根、長濱等ニ往復ス。彦根、長濱ハ、湖の東の岸ニありて、繁華の地なり。大津の近傍ニハ、近江八景の名を得たる三井寺、唐崎、堅田、比良、粟津、石山、瀬田、矢走の名所あり。中ニも、唐崎の松ハ、幹の周り五尋ばかり、數千の枝四邊ニ繁り、世ニ珍しき巨松なり。

大津より東の方數里ニ、草津といふ一驛あり。即東海道と、中仙道と、相岐る所なり。東海道ハ、是より、鈴鹿峠を越え、伊勢の海濱ニ出づることを、汝尚善くこれを記憶せるなるべし。

汝中仙道ニ就きて進まば、野洲川を渡るなり。前ニ汝ニ語りたる晒布ハ、此地より産する所なり。又此邊ニ、俵藤太の小説ニ由りて、著われたる蜈蚣山（本名を三上山といふ、又近江富士とも稱ス）あり。鳥居本より、路東ニ折れて、山間ニ入る。磨針峠、不破の關山を過ぎて、美濃ニ入る。其鳥居本より、北ニ赴く者ハ、北國街道なり。即北陸道の諸州ニ出づる路なり。

美濃路ニ入れば、路再平らなり。垂井ニ至れば、二岐ニ分る。一ハ大垣といふ名邑を過ぎ、尾張ニ出づる路

にして。一に、中仙道の本道なり。垂井の南數里より、養老の瀧なり。美濃の名所なりして、遊人の多く到る處と為す。木曾川の濃流なる、洲股川を渡り、本道より少しく北に入るべし、岐阜に至る。是美濃第一の繁華の邑なり。

中仙道に、細久手の東より、琵琶坂なり。是より、信濃を過ぎ、上野の坂本に至るまで、六十里に殆き間に、大略山中にして、山坂多く、旅行、運輸頗難し。今余輩は、信濃に入るに先だち、飛驒の概況を探らんとす。

美濃より、飛驒に入るには、岐阜より東に向ひ、更に飛驒川に沿ひて、北に進み、中央山脈と、西山脈とを連ぬる、位山の横嶺を越えて、高山に至るを、順路とす。路甚嶮しからず。高山は、此州にて、名ある邑なり。然るに此州より、北陸道に出づるには、路極めて嶮しくして、籠の渡など唱ふる難所なり。籠渡とは、澗深くして、橋を架け難きに由り、大繩を兩岸の樹の幹に繫ぎ、籠を其繩に懸け、中に人を乘せ、兩岸より、互に籠を引きて、行人を通ずる者を云ふなり。然れども、今は道路の修理行屆き、籠の渡も、名のみ遺りたれば。汝此地に至るも、籠に乘るの危險なくうるべきなり。

中仙道に從ひ、美濃より信濃に越ゆる所に、十曲峠なり。是より前は、木曾山中にして、御岳駒岳の間の、深澗を過ぐる所なれば、岨傳へに行く路多く。仰ぎて山上

て望めば、危岩崩そんとするが如く。俯して澗底を瞰へば、河水岩石に觸れて、轂雷の如し。所謂木曾の棧道い、此間の岨路の、絶えたる所に架けたる者なりしが、今い多くい改め造りて、危きこと無し。澗中、氣候寒く、五月花開き、七月麥實る。此澗の東に極まる所い、鳥井峠にして、前途にい尚鹽尻峠、和田峠なり。是皆中央山脈と東山脈とを連ぬる横嶺を越ゆる所なり。和田峠の麓にい、諏訪の湖を湛ゆ。是東海道の、天龍川の源を う。此湖い、冬の間い、氷結びて鏡の如く。人馬其上を渡るも、危きこと無し。

中仙道より岐れ、信濃の北部なる、信濃川の谷を過ぎて、越後に出づる街道なり。此地方にい、汝に語るべき處多し。即姨捨山田毎の月。上杉武田の古戰場なる河中島佛徒の信向する所の善光寺等なり。又信濃川の濫流なる犀川の岸にい松本といふ繁華の邑なり。

汝更に、中仙道に就きて進まば、信濃の東境に近き所なる、淺間山の麓を過ぐるなり。此山い、名高き噴火山にして、山の頂より火煙を噴き。偶烈しく發燒する時にい、地面鳴り動きて、燒石四方に飛ぶ。故に、汝路傍に、灰色に少しく黑を帶びたる燒石の、散亂せるを見ん。汝今此話を聽らば、何故に地面に火山なるかを疑もん。元来地球の内部にい、強盛なる火氣なり、發燒し

て火山と為り、其氣を洩らす者なり。

淺間山の麓より、尚東に進まば、碓氷峠に至るなり。

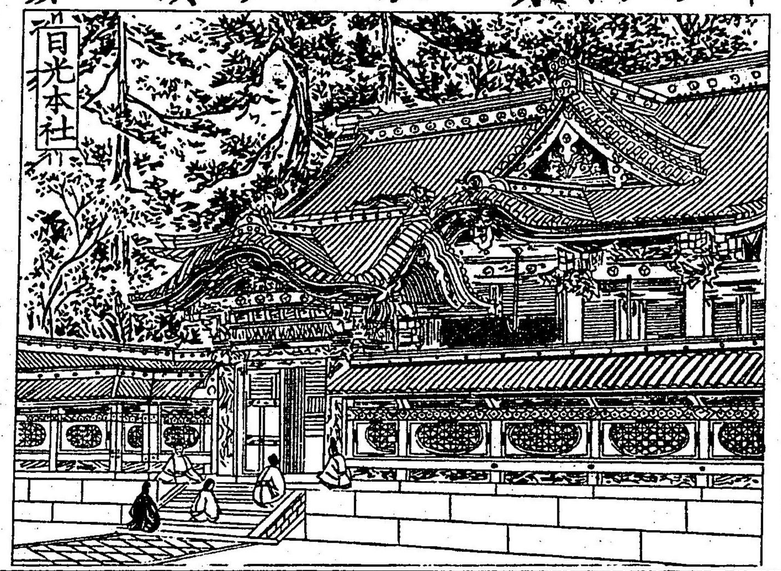
其頂は、即信濃と上野との界にして、嶺を下るべ、始めて坂東の平野に出で、地勢平遠なり。汝此間を旅する時は、右に、岩石奇秀なる妙義山を望み、左に、榛名山を望むべし。上野にて、中仙道の名邑を、高崎と為す。此處は、即三國峠を越え、越後に出づる街道の岐る所なり。高崎より艮の方數里の處、又前橋といふ名邑なり。

中仙道は、是より武藏に出で、熊谷、浦和など稱ふる宿驛を過ぎ、板橋より東京に入るべし。汝既に知る所なり。然れども、余は内地の道路益開け、上野なる利根川の濊流、片品川に沿ひて進み、岩代界の山間を過ぎ、會津川の濊流なる只見川に就きて下り、會津の平野を過ぎ、大巓の西麓なる入田澤の新道より、羽前、羽後に通ずる大路を修め、ありきをも、中仙道と稱するに至らんかと望むなり。

余は、是より、汝を奥羽街道の旅行に導き、余が東山道の話を終らんとす。此街道は、東京より北の方三十餘里の間は、所謂坂東の平野にして、一の丘陵だになくして無し。此間に、宇都宮あり。下野の繁華なる一邑なり。其西の方九里に日光あり。德川家康の廟所にして、

其結構壯麗を極め。山中よも、中禪寺の湖、華嚴の瀧、裏見の瀧等ありて、山水の風景の好きこと、東國第一と稱ふ。

下野の北部は、丘陵波浪狀をなして、二十三坂の稱へあり。磐城より越ゆる所よは、奥羽山脈と、海濱山脈とを連ぬる、白坂一帶の丘陵なれども、路嶮



このらず。名高き白河關は、古道に屬し、今其路を行くものなり。

汝是より、阿武隈川の谷に沿ひて進まば、白河、二本松、福島等の名邑を過ぎ、陸前の仙臺に至るなるべし。此地は、奥羽第一の都會にして、近傍には、宮城野、多賀城碑等あり、名所、古跡甚多し。其海濱には、近來新に築きたる野蒜港あり。磐城の濱街道には、別に汝ふ語る可き程の都邑無し。唯相馬の原町には、名高き牧場あり、世に相馬の牧と稱ふ。

仙臺より北は、路北上川の谷に沿ひて上る。此間に、往昔源義經が住みたる高館の城、安倍頼時、貞任等が據

うたる衣川の柵、鎮守府、平泉等の古跡あり。汝是より、陸中まて名高き盛岡の邑を過ぎ。奥羽山脈と海濱山脈とを連ねる、中山の山頸を越えて。陸奥の東部まで入らば。路或い丘陵波浪狀をなせる所を過ぎ。或い空曠たる原野を過ぐるなるべし。世まで聞えたる末の松山い、此間まで在り。山腹まで、海濤岩石を浸蝕せる痕を遺せ。古歌まで、「末の松山、浪こさじとい」なぞ云へる句い、是より出でたるものなり。其何故まで、海まで遠き山上まで、かく波の痕あるかいへ、汝他日地文學を學ばゞ、容易く其理を知るべしとを得ん。

野邊地より、陸奥の内海まで沿ひて、西まで進まば、奥羽山脈海まで迫る所の、馬門を過ぎ。遂まで青森の港まで達るならん。奥羽街道い、東京より此處まで至るまで、路程凡百九十里餘。又此處い、北海道まで渡る要津にして、漁船常まで箱館港まで往復を。海路二十八里餘なり。青森の西南十里餘を隔て、弘前といふ所あり、亦陸奥の繁華なる一邑なり。

前まで過ぎ來りたる街道より、會津地方まで入るべい、白河より、勢至堂峠を過ぐるを本道となす。然るまで、近來其南まで、湯入の新道を開きて、往來の便を計りたれども、宿驛未全く備たらず。會津まで、若松といふ名邑あり。若松まで近き、猪苗代の湖い、面積頗廣し。其北岸まで、磐

梯山と名つくる高峰なり。共に會津の名所なり。
羽前の米澤に入るには、福島より板谷峠を越ゆるを
順路とす。米澤には、同名の一大邑なり、盛に糸織物
を輸出す。是より、最上に出づるには、虚空藏山の山頸
なれども、其脈低くして、丘陵に過ぎざれば、通路概平
夷なり。最上には、山形とりわけ繁華の邑なり。汝是より、
仙臺に出でんと欲せば、笹谷峠の山路を越えざるを
得ず。庄内に出づるには、六十里越、清川の二道なり。其
路共に嶮し。鶴岡は、庄内地方の名邑にして、酒田は、最
上川の河口に在る港なり。
最上より羽後に入るには、院内嶺の嶮路なり。是より、

御物川の谷に沿ひて進めば、秋田に達らん。是羽後第
一の繁華の邑なり。汝是より、尚北に進まば、八郎潟と
名づくる湖水の濱を過ぐるならん。此湖は、男鹿島の
半島と、大陸の間に湛えたる者にして、湖山の風景、賞
するに堪へたり。能代川の河口に至らば、一つの繁華
なる港なりと見ん。是即能代にして、春慶塗と稱ふる
塗物を産する所なり。是より汝は、東山道の都邑、名所
は、大略旅行し了りたるなり。

第十一章日本志の續

北陸道

北陸道は、東山道に並び、坤より艮に向ひて、若狭、越前、

加賀、能登越中、越後の六州を連ね、越後の近海は、佐渡の一州なり。此地方は、通じて、北國とも稱ふるなり。

海岸は、西部は在りては、出入甚しくして、恰鋸の齒の如く、小濱、敦賀等の入江なり。中部は、能登の半島、遠く日本海に突き出でゝ、越中の大灣を擁す。其東岸なる、七尾灣なり。半島の極端は、珠洲岬といふ。東部なる越後の海岸は、六十餘里の間、殆一直線にして、一も著しき岬灣なること無し。

北陸道は、東山道より續きたる二大嶺、中間を横截りて、地勢自三部に分きたり。即汝ぐ地圖に於て見るが如く、若狹、越前、加賀、能登の四州は、西山脈の西に在り。

越中、及上越後の地は、西山脈と中央山脈の間に在りて、中の一部を為し。中越後、下越後の地は、中央山脈の東に在りて、羽越山脈を帶ぶる者是なり。

今委しく、其地勢を論ずる時は。西山脈の西なる四州の中、若狹は、西山脈の横嶺と、中國山彙の餘勢を受け。到る處山多けれども、一も高き者なし。越前は、西山脈東南の境に亙り。西北の方は、漸低くして、舟橋川、及其濕流此間を流れ、沃野頗廣し。然るに西南部には、西山脈より支を出でたる、木芽嶺なりて、直に海岸に迫り、敦賀の地方を隔絶す。加賀は、西山脈東境に連り。白山其間に聳え、支嶺は、更に越前の界を限り。手取川中間

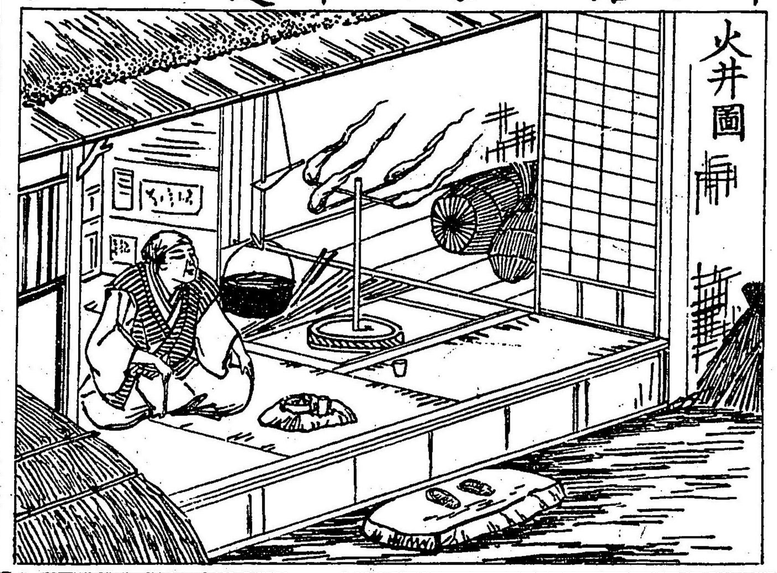
と流る。地勢概平らにして、海濱に瀉と稱ふる沼多く。地味は概肥えたり。白山は北陸第一の高山にして、峰に積まる白雪、終歳消えず、然もいとこそ、世に白山と稱へらるゝなれ。能登は、西山脈の餘勢を受け、丘陵浪の如くに連ぎども。一も汝に語る可き程の高山も無く、又大川も無きなり。

越中は、西山脈と中央山脈との間に在るに由り、其横嶺左右より迫り、神通射水など稱ふる、數條の迅流、此間を流る。然もども、海濱は平野頗廣し。立山は、中央山脈の中に聳え、此州の最高き峰なり。此山は、火山なれば、山中に火坑多し。佛徒の方便にて、これを地獄と稱ふ。佛教に迷ふ者は、皆現世に罪を犯せば、死したる後、かゝる恐る可き、地獄の中に墮落し、閻羅王と、其屬下の鬼の為に、限り無き苛責を受くるといふことを信ずるなり。上越後は、中央山脈の過ぐる所にして、到る處に山多く。燒山、妙香山など稱ふる高峰なり。

中央山脈の東なる中越後、下越後の地は、主として、信濃川、阿賀野川の流々所にして。沃野遠く連りて、際を見ず。只彌彦山と稱ふる孤峯の、海濱に峙てるを見るのみなり。此平野の長さは、殆四十里に及べり。信濃川は、中土第一の大河にして、其瀑流甚多きが故に、世に八千八水河の稱なり。阿賀野川は、即岩代の會津川

の下流なり。羽越山脈中の高山の事は、東山道の志中、既にまれなれど汝に語るべきなり。

越後には、天然の奇觀に就きて、汝に語らべき一事あり。即火井とて地中より火氣を發する者是なり。此火は、或は燈火に代へ用ひ、或は物を煮るとなどを得べし。余今汝ぐ



為に、其畫を示さん。

佐渡は、地形法馬に似たり。其兩邊の廣き所は、山嶺多く。中間の狹き所は、平野多し。金北山は、島中の高峰ふり。

氣候を論ずる時は、北陸道は、南に山を負ひ、北の方海に向ふに因りて、寒氣强し。殊に、西山脈より東の地は、寒氣一層烈しくして、越後の某の地の如きは、冬は雪積もること一丈に餘り。人家に出入するは、恰地窖の中に出入するが如く。市街の間は、雪に埋まれたる簷の下より、纔に行人を通ずるに至る。又雪國には、山上の樹木の梢より落つる所の雪片、漸轉け落つるに從

ひ驚く可き大塊と為りて、行人を壓殺し、或い春暖に向ふ頃い、頽雪(なだれ)として、山腹に積もる雪の、俄に崩れ落つる等の危險なるなり。

産物い、天産物にい、佐渡の金、銀、越後の石腦油を主とし。水に鮭、大口魚、鯛、鰈、鰤、鯨多く。製造品い、若狭の若狭塗、越前の奉書紙、奉書紬、加賀の九谷燒、加賀絹、金澤の象眼細工、能登の輪島塗、越中の銅鐵器、呉郎丸布、越後の越後縮、五泉平、木綿を佳しとす。而して、其最名なる物を擧げば、佐渡の金、銀第一に位し、越後縮これに亜ぐ。佐渡の金、銀い、即金北山の南より、掘り採る所にして。越後縮い、多く小千谷より、織り出す所ふ

う。

余い尚、北陸道の志を反覆して、其都邑及勝區を摘說せん。若狭い、疆域狹く、名邑少く、汝に語るべき者い、小濱の一港なるのみ。小濱の沖に、外面と名づくる岩石島なり。これを、若狭第一の名所と為す。

越前の西部の海濱にい、敦賀なり。北海第一の重要ふる港にして、船舶多く集まる。近頃此港より、大津に連なる、轍道を築かんとする企なり。又此地より、近江の東部に出づるにい、刀根越にして、西山脈の横嶺を過ぐる坂路なれども、嶮くして。其路、鳥居本にて、中仙道に合ふにい、既に汝に語りし所なり。

敦賀より、越前の東部の平野に出づるまい、木芽嶺湯尾峠の嶮しき路なり。平野に出づるまい、舟橋川の漲流ある、足羽川に跨りて、福井といふ名邑なり。越前第一の繁華の地なり。足羽川にまい、九十九橋と稱ふる橋を架く。半い石にて造り、半い木にて造り、尤奇巧あり。福井の東里許にして、九頭龍川に至る。其舟橋の名、世に高きと以て、此河を舟橋川と稱ふ。河の傍に、新田義貞ぐ戰死せし古跡なり。今其地に藤島神社を建つ。河口の坂井港も、亦繁華の地なり。

北國街道い、越前より加賀の界に、熊坂越なきども、路甚嶮しかりぐ。加賀に入きべ、加賀絹の産所ある大聖寺、及小松等の名邑なり。金澤に至きべ、市街壯麗にして、人口多く、其景況、尋常の都會の比に非ざるを見る。是我邦に在りて、名古屋に亞ぐ可きの大都會なり。其海濱にい、金石にて、矮船を泊を可き港なり。

金澤より、支路に從ひて、能登に入きべ、西の海濱にて、漆器の産所ある輪島を過ぎ。東の海濱にて、七尾の港を過ぐ。七尾い、北海第一の良泊地と稱ふる所なり。能登の海濱い、風景に富める所多し。

北國街道に從ひ、加賀より越中に出づるまい、路俱利伽羅峠を過ぐ。此地い、昔木曾義仲ぐ、平氏の軍を鏖にせし古戰場なり。然るども、今い其北の山間に、天田越

の新道を築きて、往来を便りせり。

越中より入れば、銅器の産を以て名高き高岡に至る。神通川を渡れば、富山といふ一大邑なり。神通川は其流速きを以て、舟橋を架けて、往来を通ぜり。是より、海濱に出づれば、魚津港なり。富山、高岡、及魚津は、越中にて、三都會と稱ふる所なり。

越中より越後に出づる所は、中央山脈の海に迫る所あ〻して、斷崖の下、纔に路を通ずるのみなれば、風吹き、浪荒ぶる時は、激浪路を衝きて、行人を捲き去るの危險なり。故に、崖腹に洞穴を穿てる所なりて、激浪来る時は、行人此中に避け、浪の退くを待ちて、此間を走り過ぐ。其危きこと、親子尚相顧るに暇なしといふべしとなり。此處を、親不知と名づけたり。

關川の河口に至れば、直江津なり。上越後の重要なる港にして、信州半國の魚鹽は、大抵此地より送り輸す なり。路是より南に入るものは、信州街道にして、高田といふ名邑なり。其西なる春日山は、上杉謙信の城址なるを以て名なり。北國街道に就きて、上越後の東境に至れば、米山越あり。是亦中央山脈の海に迫る所なり。是より路概平なれども、寺泊の前に、彌彦山の坂路なり。寺泊は、即佐渡へ渡る港にして、海路直徑十里許なり。

信濃川の河口より至るべし、一の繁盛ふる港なり。是即新潟として、外國人と貿易を為す所なり。信濃川より、小流船を浮べて、此港と、内地の長岡との間より、通航を開きたり。北國街道は、是より良に向ひて、内地に入り、新發田村上等の名邑を過ぎ。鼠關より、羽前の庄内の地方に出づるを本道とす。又新潟より、信濃川に沿ひて、内地に入り、三條長岡等の名邑を經て、東山脈中の三國峠を越え、上野に出づる路なり。三國街道是なり。余輩越後を旅する時、屢奇異の處を過ぐるをとなり。即此州は、前に汝に語りたる火井多く。又臭水として、油の涌き出づる井、或は鹽の出づる井なりと見るもの是なり。此臭水と稱ふるは、即石脳油の事なり。佐渡は、汝に語る可きの處少し。唯小木は、越後へ渡る港にして、相川は、島中の都會の地なれば、汝宜しくこれを記憶すべし。

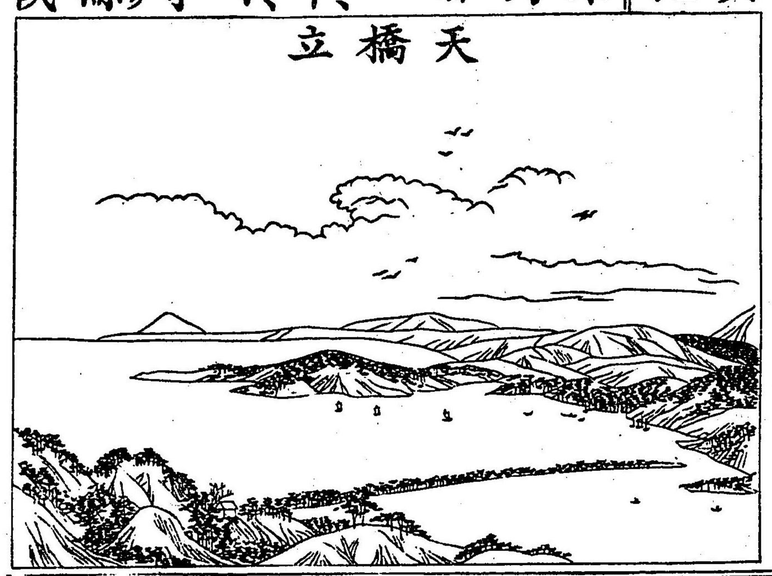
第十二章　日本志の續

中土の西部ある山陰、山陽の二道は、總て中國と稱へ、長さ百十餘里にわり。立陵縱横に連り、地形狹き故に、大川、廣野なし。山嶺は、中央に亙きる者稍大にして、大略山陰道と、山陽道の界を限る。山陰といひ、即山の北の義にして、山陽といひ山の南と云ふが如し。然きども、其山は、曾て東山道にて見たるが如く、高くして峻しき者なし。又山陰と山陽とを比ぶる時は、山陰は、山嶺多く、山陽は、平野多しとあり。

山陰道

山陰道には、八つの州わり。即山城の西ある山間に、丹波の一州わり。丹後は、其北に接きて、日本海に枕そ。但馬、因幡、伯耆、出雲、石見、其西に連り、出雲の海上に、隱岐の島々わる者是あり。

海に沿ひたる諸州の中、丹後は、海岸出入甚しく、舞鶴の入江、與謝の海等わり。與謝の海には、一條の沙嘴わり、殆海を横截



ヨリて、其狀恰橋の如し。是所謂天の橋立の勝よりて、幾株の青松枝と交へ、風景畫の如し。伯耆よりハ、夜見濱の沙嘴あり。弓の如く曲り出で、島根の半島と相對ひて、中海（一名錦海）を擁く。其他の海岸ハ、概一直線をなして、著しき岬灣なるものとなし。

山河の形勢と論ずる時ハ。丹波ハ山嶺四境を圍ミ、中央より也、亦一帶の嶺なりて、地勢高く、平野少なし。中より也、東北の方ハ、山高く、谷深く、山城の桂川丹後の大川の源、此地より發す。大江山ハ、丹後より連りたる深山なりて、源頼光ゞ鬼賊と平げし事蹟と以て、特に世に顯はれたり。丹後ハ、丹波界の山嶺の餘勢と受け、山々處處に蔓りて、平地少なく。由良川丹波より来りて、由良湊に注ぐ。是州内の大河なるに由りて、單に大川とも呼べり。

丹後の西なる但馬、因幡、伯耆、出雲の四州ハ、各南に大なる嶺と負ひ、地勢北に向ひて從ひて漸低く、河水皆北に流る。南境の大嶺ハ、但馬より播りて、冰山とあり。伯耆より秀でゝ、大山とある。大山ハ、中國第一の高峯にして、溪間の雪ハ、夏尚消えず。出雲の船通山ハ、古、鳥上山、又簸川上ともいふ。此地ハ、上古、素戔嗚尊ぶ、稲田姫の為に、八岐の大蛇と斬り、天叢雲の劍と得しと傳ふる所なり。而して、此四州の界より、各著しき横嶺の、南境の

大嶺より支を出でたる有りて、恰天然の限界をなし。其間よい、又各一條の大川なり。但馬の城崎川因幡の賀露川伯耆の日野川出雲の簸川是あり。中ふも、城崎川賀露川の谷、及簸川の下流よ沿ひたる地い、平野頗廣し。又出雲の島根の半島い、大陸と宍道の湖、及中海とを擁き。外面い、日本海の波濤と受け、斷崖削るが如く、其海上よい、岩礁亂を立てて。

石見の地勢い、前の四州と異あり。數多の横嶺、州を横截りて、海よ迫り、到る處山谷相望む。斯の如く說き来らば、汝い、石見い其名の如く、嵯峨たる岩石多き州なりと思ふなるん。然きども、其實い然らず。山い平夷ふして、雜木、度草の茂りたる者多く、唯田畑と道路よ石多きのみ。此州よて、最名なる山と、三瓶山といひ。最名なる河と、江川といふ。三瓶山い、出雲界の嶺中よ秀で、山陰道よて、大山よ亞ぐべき高山なり。江川い、水源遠く山陽道の安藝より發し、中國第一の大河よして、舟運の便甚大なり。

隱岐の島よい、大なる者四なり。即島前と總稱する知夫里中島西島の三島と、島後と稱ふる一島あり。島中山多けきども、汝よ語る可きい、大滿寺山といふ一山なるのみ。河い悉溪流よして、其名と擧ぐるよ足らず。

氣候い、北陸道よ比ぶきば、稍暖ありと雖、山嶺南と塞

ぎ、北海の寒風を受くるを因りて、寒氣強く、積雪三四尺に及ぶ所なり。丹波は、山嶺の間に在をば、殊に陰寒、まして、雲霧常に深し。地味は、肥沃の處多きに非ざれども、瘠薄の地多きに居をア。

産物の主眼ふるものを擧げば、丹波より煙草、茶を産し。丹後より縮緬、撰絲を出し。但馬の生野の銀山は、産出の量夥しく、出石の陶器、豐岡の柳行李も、名ある品なり。伯耆の鐵、木綿、出雲の銅、鐵、人參は、輸出特に盛ふして、因幡、伯耆の白珊瑚、出雲の十六島海苔、蜜柑、其他の果物、亦世に名なり。十六島海苔は、尤奇品にして、其大なる者は、八疊敷を塞ぐに至る。石見よりは銀、銅、半紙等を出せども、五穀の産少ふきを以て、貧人多くは甘薯を食ふ。隱岐には、材木の外、汝に語る可き産物ふし。此他處々より生絲、蠟、漆、蜂蜜等を産し、沿海の魚産も、亦大ふり。

山陰道には、上古より、世に顯はきたる地方ありて、多く神代の事蹟を傳ふ。地理の事に就きて、亦笑ふ可き口碑を存す。即今の島根の半島は、曾て海上に漂ひ去らんとせしを、神は伯耆の大山と、石見の三瓶山とを、大繩を張りて、おきを繫き留めたり。其繩の延きたる處は、今の夜見濱の沙嘴と、神門の地頸を成せりと云ふ者是なり。然れども、夜見濱の沙嘴と、神門の地頸の

成うたるい、固より由縁ふきまいとよいあるべ。汝試と
よおれと考へよ。
余い是より、山陰道の都邑、名所ゑ就きて、其概略と語
らんとん。丹波ゑい、亀岡、福知山といふ二つの邑なり。
亀岡い、桂川の上流ある保津川ゑ沿ひ、京都と距るゑ
と六里許。福知山い、由良川の上流ある福知川（一名音無瀬川）
ゑ沿ひ、この地より小舟と通ぞ可し。道路い、概山坂上
う下うて、平坦の處少ふー。
福知川の溪間より、丹後ゑ下きべ。河守の驛ゑ近き所
ゑ、内宮、及外宮と稱ふる社たり、その地と元伊勢と稱
へ、賽客四方より来り集る。此地ゑ賽する者い、皆其真

の伊勢ゑ詣でしゑ此しきと信ぞるあり。舞鶴の入江
の底ある舞鶴、與謝の海ゑ沿ひたる宮津い、此州の繁
華ある港とあん。外海ゑ沿ひたる地ゑも、名所多く。小
説ゑ、亀ゑ乗うて、龍宮ゑ行きしと唱ふる、浦島子の古
跡等たり。此州の道路い、海濱と雖、山坂崎嶇たる處多
し。
丹波より但馬ゑ出づるい、丹後路と經るよりも、福
知山より、上尾峠と越ゆると便路とあん。出石、豊岡ハ、
沿道の盛ある邑ゑ、城崎川の河口ゑ近き湯島ハ、
名高き温泉たり。豊岡より因幡ゑ出づる間の路い、處
處ゑ山坂たり、山脚往々海ゑ迫ると見る。然るゑ城崎

川に沿ひ、生野を過ぎて、播磨に出づる路は修理行届きて、馬車を通ずるに堪へたり。

因幡に入るべ、賀露川の東に、鳥取といふ名邑なり。鳥取の巽に當りたる因幡山は、宇倍神社なるに由りて、宇倍山ともいふ。古人の題詠を以て其名高けれども、畢竟尋常の山にして、峯も高からず、風景も珍らしからず、海濱一帯皆沙にして、通路此間に在り、輕沙脚を没し、行歩極めて艱む。故に、旅人は、波打寄せる汀を撰びて、通過するなり。

伯耆の東境に入るべ、東郷の湖なり。湖中に小島なりて、温泉湧き出づ、汝此地に遊び、温泉の傍、湖に臨める旅店に宿り、湖中に游泳する魚を釣らば、如何むこうの愉快ならん。伯耆を旅する時、州の中央、大山の東に當りて、船上山と名づくる一峯、高く聳ゆるを見る、此山は、南朝の時、名を轟したる、名和長年が、後醍醐帝を奉じて、立籠りたる所にして、普く世に知らるたり。名和村には、今尚名和氏の館址、墳墓等なり。中海の岸なる米子、夜見濱の北の端なる境は、此州の名なる港なり。出雲に入るべ、中海に沿ひて、安來といふ名邑なり。出雲にて、通商最盛なる地なり。此邊を旅する時、路の左に天狗山を望む。是古より名なる所にして、其麓に熊野社なり。中海と、宍道の湖と相通ふ所に至るべ、松江

といふ名邑なり。山陰道第一の繁華の地にして、風景佳し。然れども、其水い芥流を満ちて、汝の想ふが如く清潔ならず。松江の鱸い、此處より漁する所にして、美味を以て名なり。島根の半島の西の端なる杵築の大社日御崎の社も、亦此州の名所なり。中にも杵築い、大社なるに依りて、人民集りて小都會を成せども、平時い甚寂寥たり。

汝若石見に至らば、一奇事を見るべし、即到る處の村里皆甘薯を作り、甘薯代官の石碑を建つる者是なり。是石見い、土地磽确、五穀に適せず、人民動もすれば、飢に迫るを以て、井戸平左衛門といふ人、甘薯の耕作を奬め、其業こゝに盛なるに至り、人民其德を懷ひて、紀念碑を建てたる者なり。斯の如き州なるに由りて、人煙繁盛の都會にて、一もなることあく、唯濱田津和野の二邑稍名なるのみ。海濱にい、歌仙人丸に依りて著しき高角山、及床浦の勝あり。州内の道路い、概山坂崎嶇にして、山陽道に出づるにい、嶮岨の處少からず。隱岐い、伯耆の境港より、二十里の遠き海路を隔て、且佐渡の如き富もなければ、人民の交通甚疎なり。島後の西郷い、隱岐にて名なる港なり。

第十三章　日本志の續

山陽道

山陽道ふも、亦八つの州なり。畿内の攝津より接きたるを、播磨といひ。美作、備前、備中、備後、安藝、周防、長門、其西より連る。此八つの州の中、播磨、備前、備中、備後、安藝、周防、い、南の方、瀬戸内海より臨み。美作い、備前の北の山間より。長門い、中國の西の端よりして、三方より海を繞らせり。

瀬戸内海い、其名の如く、四邊より殆陸地を繞らして、纔より明石鳴門、速吸、早鞆の四つの瀬戸ふて、外洋より連きり。瀬戸といい、二つの海を連ぬる、水の狹き通路よりて、地理學の語よりていい、通常海峽と稱ふるなり。此内海い、山陽道の海岸、出入最甚しく海上よりい、八代、倉橋、江田、の島々、及南海道の小豆島を主とし、八百餘の島嶼星の如くより連りて、風景絶佳なり。余曾て船よりて此間を渡りしに、安藝の沖より至りし時、夜漸明け放を。朝霧の絶間より見ゆる帆前船の、點粧いと面白き島々の間を過ぐるさま。陸地の山々、朝日より映ぜるさまなど、筆紙より盡し難き趣あり。余の見たる所よりていい、世界より比稀ある好景色の地と思はれたり。

山陽道の地勢い、山陰道と相反し。長門の一州を除くの外い、皆北境より大嶺を負ひ。地面漸南より低く。河流概南より向ひて流る。北境の大嶺い、山陰道の如く俄より高くして峻しかるべ。嶺中の高峯い、播磨の笠形山、美作

の那岐山、安藝の十方山等よりして、山陰道の冰山、大山、船通山等と脈を連ねたり。

然るに、此大嶺より、數多の横嶺支を出で、山陽道に、更に數樣の小平野を分つる。即東部よりて、播磨の東境を亙まる横嶺と、美作の東と西とを亙まる横嶺頗大ふして、播磨の加古川、揖保川、備前の東大川、西大川等、此間の平野を流る。又備中よりて、河邊川なり、沿水の平野甚廣し。

中部の備後及安藝に、横嶺弓形を州の中央を横截り。天神岳、大土山等此間に時ち。兩端に、北境の大嶺に連りて、楕圓形の谷を抱く。此谷に、即江川の上流ある三次川、吉田川の流を通る所あり。横嶺の南にも、亦葦田川、大田川あり。沿水の平野頗廣し。横嶺中の御神山に、汝に語る可き一奇觀なり。即鬼橋とて、岩石溪流に跨りて、天然に橋の形を成し、もの是あり。

西部の周防に、地勢恰山陰道の石見に似て、數多の山嶺波濤の如くに連り、平野少し。然れども、其山に一も高き者ふし。唯滑山のみ、山谷幽深にして、樹木繁茂し、此州にて、最貴き山とする。岩國川に、此州の大川にして、下流に、名高き錦帶橋なり。

長門に、中國山彙の海に迫る所あれば、何處も山嶺ふらざるふし。一位岳に、連山中の最奥峻なる者にし

て、萩川ハ、河流中の最大なる者なり。
氣候ハ、概温和なして、嚴冬も、寒暖計偶氷點ニ下るハ
となるニ過ぎず。然れども、長門の北海ニ濱せる地方
ハ、寒氣强く、海風又烈しきニ由り、人家の構造皆矮し。
地味ハ、備後の西北部、安藝及長門の北部を除くの外
ハ、概肥沃なして、産物饒し。而して安藝ハ、他の州ニ大
ニ異なる景況を現ハし。はいまを隣る備後及周防等
の山ハ、樹木鬱蒼たるニ、安藝の山ハ、多くハ赭山なし
て、草木なく、水源も亦隨ひて乏く、土地極めて瘠せた
り。
産物ハ、播磨美作備中備後安藝より多量の鐵を産し。

其他處々より銅、蠟石、石炭を産す。長門の赤間の硯も、
亦礦産中の名なるものなり。製造品ハ、播磨ニ華細工、
赤穗鹽、龍野の醬油なり。美作より雲齋織を出す。三備
の藺席ハ、輸出殊ニ盛なして、備後の産を最良とする。
備後表の名ハ、人の普く知る所なり。備前の伊部の陶
器、備中の紙、備後の鞆津の酒も、亦佳品なり。安藝の山
村ハ、多く苧を植ゑて、麻布を織り出し。周防ハ、岩國縮
布、縮木綿を出し。此二州共ニ紙ニ名なり。山陽の諸州
ハ、又綿、木綿、生絲、烟草等を産ること少なくして、沿海
の漁鹽の利、亦饒く。中にも、安藝の海ニハ、牡蠣田あり
て、夥しく牡蠣を産し。長門の北の海ニハ、多く鯨を

捕る。

山陽道は、地面の良きと、氣候の快きと、港泊の便りよきとに因り、人口繁殖し、其數山陰道に倍せり。中にも播磨は、田野大に闢け、人口最多し。

余は是より、汝と山陽道の旅行に伴ひ、其都邑、名所を探らんとす。須磨の濱傳ひに、播磨に入れば、數里に亙る白沙の濱に幾株の青松枝を交ふるあり、風景の勝須磨に劣らざるを見る。是舞子濱と稱ふる名所にして、濱を過ぐれば、明石といふ名邑に至る。

汝是より西に進まば、加古川の口にて、高砂といふ處に至らん。是亦海濱の名所なり。高砂に近く、石寶殿の奇觀あり。即一つの大なる石室、屋を横にし、戸を上にして、小池の中に横はる者あり。此石寶殿に就きては、種々の奇談あれども、虚誕に近し。

市川を渡らば、姫路といふ繁華の邑に至らん。此邑は、中國の要路に當り、但馬、美作其他の州より、畿内に出づる者概此處に由らざるは無し。姫路の北に當り、一座の峯あり、是書寫山にて、播磨にて名ある山なり。海濱の室津も、亦此州にて、名ある港なり。

播磨より、美作に出づるに、路に山坂多きにあらざるも、概平夷なり。津山は、美作の名邑にして、東大川の上流なる津山川の北岸にあり。河を隔てゝ、久米皿

山を望む。この邊い美作の尤風景好きところあり。美作より、伯耆に出づる路に、四十曲峠なり。然れども、名にて想像するが如く、嶮しかるべ。中國第一の高山ある、大山の脇を過ぐる峠にして、尚斯の如くあれば、汝い推して、他の通路の概平夷なるこを知る可きなり。

中國路より、備前に入るに、舟坂なれども、路嶮しからず。岡山い、此州の繁華なる邑なり。西南部の兜島い、元一つの島にして、其海峽を藤戸の渡と稱へ。昔源平の戰に、佐々木盛綱の、騎渡して軍を導きし所と傳ふ。されども。今い海峽塞りて、一つの半島となれり。

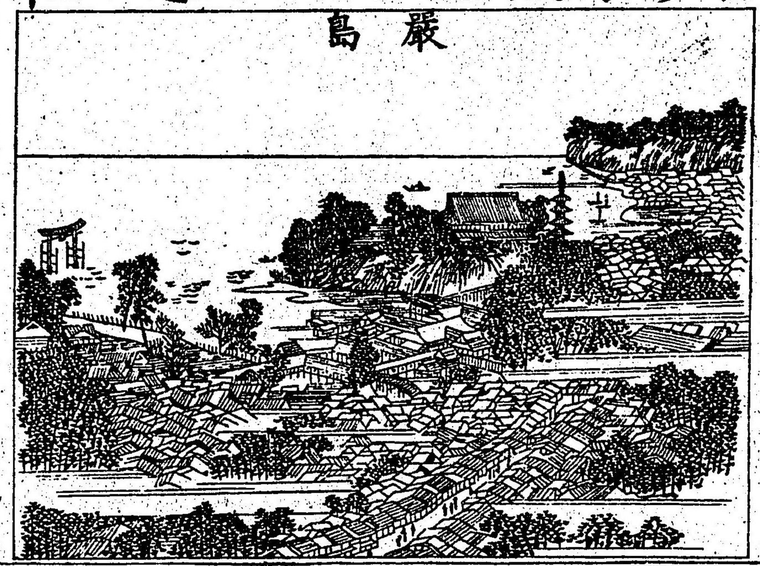
備中の界に至らば、汝い吉備の中山を過ぐるなるべ。此處に祀る吉備神社い、結構壯麗にして、世に名高し。其街を宮内と稱ふ。備中に、外に汝に語る可き所なし。

備後に、海濱に福山・鞆津・尾道等の名邑なり。中にも尾道い、中國路に當り、且船舶の湊ひ集まる所にして、繁華なり。是まで過ぎ来りたる、三備の中國路に、概平坦にして、汝に語る可き程の山坂なし。

汝安藝の東部に入らば、丘陵浪の如く、路凹凸多きに困むべ。是即天神岳・大土山の支脈の、南に延びたる者にして、海濱に秀でて、野呂山とある。大田川の口

は、廣島といふ都會なり。山陽道第一の繁華の地なれば、土地の人は、誇りて山陽の大坂と稱ふ。周防の界は、山脈海に迫り、中國路は、四十八坂の稱ありて、路頗惡かりしかども、今は多くは修め繕ひて、平夷の路となれり。

安藝の近海、島嶼多き中



に、嚴島とて、世に知らるたる一島なり。此島の大陸に向へる海岸に、市杵島姫を祀る社あり、崖に倚り、水に架し、神殿、廻廊壯麗にして、奇觀あるに、四邊の眺望の佳きこと、言辭に盡し難し。是即前に汝に語りたる陸前の松島、丹後の天の橋立と共に、日本の三景と稱ふる所なり。

汝周防に入りて、岩國川に架けたる錦帶橋を渡らば、岩國といふ名邑に至らん、是より金明寺峠を越えて、西に進めば、德山の邑に至る。宮市に至れば、名高き天滿宮なり。社頭の壯麗なるに、市街の繁華なるは、筑前の宰府に勝るとも見る。此處は、即中國路と、山口を經

て、長門の萩より出づる路の岐るゝ所あり。中國路は、是より長門の赤間關に至るまで、二三の山坂おきあらざれども、皆小にして、其名を掲ぐるに足らず。而して中國路は、明石より赤間關まで、百二十餘里の間、人車を通ぜざる所おきなり。

宮市より山口に出づるには、路に山坂多し。汝此間を過ぐる時、岩石奇秀あるを以て名高き、右田岳を望むあらん。山口は、山峽の間の一名邑なり。山口より萩に出づる路は、山に上り、谷に下り、嶮岨の處少からず。中ふも一坂を最嶮しとあり。萩は萩川の口に在り、北海に面ひたる一名邑あり。是より赤間關に出づる路も、概山谿崎嶇たる間に在り。

赤間關は、又下關とも稱ふ。早鞆の海峽に臨める港ふして、南海より西海、北海に向ひて航する者、皆此處を過ぎ。中國より陸路九州に赴く者、亦皆此處に集まるに由り、市街甚繁華なり。其浦には、源平の古戰場なる壇浦あり。汝其濱邊に行くべし、平家蟹と名つくる、奇異の一介蟲を檢出せらん。又此地は、文久三年十七年前長州侯が合衆國及佛蘭西の軍艦と、戰を交へし所なり。

第十四章　日本志の續

南海道

南海道は、三つの相離れたる陸地を併せたる、一大區

ふして、内は六つの州あり。即畿内く東海道の南は接つきて、磐の形を成せる地方を、紀伊とふし。茅渟の海と瀬戸内海の間は横たはりて、靴の形は好く似たる小島を、淡路とふし。瀬戸内海の南を限ぎる大島は、四國はして、阿波讃岐、伊豫、土佐の四つの州を包ねる。天然の形勢を論ずる時は、紀伊は大和の南部より續きたる、數多の山嶺なり。中にも大塔峯は、此州第一の大山はして、山脚十里は亙る。高野は、金剛峯寺の在る所なるは由りて、世は其名高し。山中杉、槙等の巨樹生茂りて、幽邃なること、寺院の宏壯なるとと、他は多く見ざる所なり。河の大なる者、亦大和より来り、成川は中央を流れ、紀川は北境を流る。紀川の邊は、地勢濶けて、沃野多し。海岸は、山脈海は迫る所多く、斷崖嶮しくして、出入多けれども、一も大なる灣をなすなし。最南の地を、潮岬とりふ。其海上は、潮流甚速し。

淡路は、由良の海峽を以て、紀伊と相分る。此間は、友島なるは由り、或は友島海峽とも稱ふ。其山陽、及四國と、相分る所の海峽の事は、山陽道志中既はふ記きを汝は語まる。此島は、地面狹けれども、汝は語る可き程の高山、大川なし。地味概肥えて、田畝大は闊けたり。

四國の地勢は、山嶺概東西は脈を連ね。中央の山嶺殊は高くして、石鎚、矢筈、白髪なぞ名づくる山々、此間は

秀で、吉野、仁淀の二つの大川を出す。山嶺是より漸四方に向ひて、高度を減ず。

今委くこれを論ずる時は、阿波より、一帶の山嶺、州を横截まるなり。其脈土佐の界に沿ひて、中央の大嶺ふ連なる。脈中一峯拔でゝ峨然たる者を、劍山と名づけ、其支脈南に延びて、室戸崎となる。故に阿波は、地勢自南北の二部に分れ、北部は、吉野川の流れを通ずる所よりして、地味尤肥えたり。

讃岐は、阿波の界に、一帶の嶺を帶びたれども、甚高き峯なく、州内沃野廣くして、伊豫の東部の平野に連ふる。伊豫の中央には、石鎚山の横嶺なり、北に亙りて、野間の山嘴となり、東部の平野に道後の平野を隔つ。道後の平野は、地味尤肥えたり。西部の宇和の地方は、山嶺多くして、平野を見ず。

土佐は、山嶺疊を重ねて、殆地面の三分の二を没し。高知近傍、僅に耕作に宜しき平野を遺すのみ。山嶺は、仁淀川の北に亙る矢筈山南に亙る唐岩山の脈、及東境の野根山の脈最大にして。河は仁淀川と、西部の四萬十川を最大なりとす。

四國の海岸は、出入一なふ、中にも伊豫の西岸は、入江と山嘴と相錯りて、鋸の齒の如し。佐田山嘴の如きは、串の如く延び出づること九里許、近く九州の豐

後に對ふ土佐に室戸蹉跎の二つの岬突き出でゝ、其間に一大灣を擁く。是昔劇しき地震の為に、陸地陷りて海となりし所なり。

阿波と淡路の間なる鳴門の海峽に、汝に語る可き一奇觀なり。即大鳴門小鳴門とて、海水の渦をなす者ふして、鳴り轟く水聲は、恰雷の如し。渦は、簡略に云へば、殊なる方向に流々潮の衝突るに因りて起る者なり。

南海道は、南海に沿ひ、熱帶より廻り来る潮流を受くるに因りて、氣候温暖なれと雖、伊豫及紀伊の山間は、雪多くして、較寒冷なり。地味は、前に屢汝に語りたる如く、肥沃の處多くして、産物饒なり。

産物は紀伊に蜜柑、其他の果物、材木、漆器等なり。中にも蜜柑は、遍く世に知られたる産物にして、培養の盛なること、驚くに堪へたり。余曾て此地に遊びし時、三四里に亙りたる蜜柑林數箇處を見たり。阿波は藍、鹽、砂糖に名なり。中にも藍は、第一の輸出品となる。讃岐、伊豫は、砂糖と鹽に名なり。伊豫は兼て紙を産す。土佐紙の輸出は、甚盛にして、其海よりは、珊瑚、堅魚を産す。堅魚は、蒸し乾して堅魚節となし、四方に販くこと夥し。又紀伊、土佐の海にて、多く鯨を捕り。四國は、處々に銅、石炭の礦山なり。

余ハ大略南海道の天然の形勢、産物の事を説き了りたまひ、是より話を轉へて、其都邑、名所の事を語らんとす。

紀伊ハ、前ヨ汝ヨ語りたるが如く、地形磬ヨ似たる故ヨ、州の東部ある熊野ヨ行くヨハ、大和よりするを便路とふし。西部ヨ行くヨハ、泉州路或ハ

鯨
獵

香風館藏版

海路を取るを空とふす。此州の道路ハ、總て隘くして嶮しく、旅客の難少からず。余曾て大和路より熊野ヨ行きしが、六七里の間、人家を見ざる所あり。余辨當と鞋を携へずして、大ヨ困をたり。然ども此地ヨハ、昔より世ヨ知らるたる熊野の社、那智の瀧等の名所あり。中にも那智の瀧ハ、高さ八百四十尺あり、我邦ホて雙無き壯觀あり。又三熊野の一ある新宮ハ、人口多く一方の名邑たり。熊野の海濱より、伊勢ヨ出づる路の如きハ、極めて嶮しくして、此處を旅をる者罕なり。泉州界の山坂を越えて、紀伊ヨ入きび、開濶ある平野ヨ出づ。是所謂紀川の谷ヨして、河の南ヨ、和歌山とい

香風館藏版

ふ都會なり。南海道の最入口多き所よりて、市街賑ハしく。其海よハ、和歌浦の名所なり、海よりさし出し洲崎の松原、玉津島の社などを見え渡りて、眺望いと面白し。此邊よハ、紀州富士の名を得たる龍門山、前よ汝よ語りたる高野の金剛峯寺、及粉河寺等名所尚多し。和歌山より、州の南の端よ至るの路ハ、山脈海よ迫る所多くして、峠の多きこと、一々汝よ語るふ遑なし。殊よ田邊といふ一邑より、潮岬よ至るの間ハ、地極めて僻ふして、旅客一層の困難を覺ゆるなり。淡路ハ、汝の知るが如く、海上よ孤立せる小島なるよ由り、人民の交通至て稀なれば、其地理を復説まるを要せざるべし。而して此州よハ、實よ汝よ語る可き程の都邑、名所ふきなり。

畿内より四國よ渡るよハ、大坂、或ハ神戸より、瀛船よ乗りて、阿波の德島、或ハ讃岐の志度、多度津等よ航を為る便宜とあり。德島ハ、吉野川の河口よ在り、商船四方より湊ひ集まり、通商盛ふして、四國第一の都會たり。

讃岐よハ志度、高松、丸龜、多度津等の名邑なり。汝此地を旅する時、志度高松の間よて、五振の劍を併べたる如き五劍山（其一崩る今）、源平の古戰場ふて、屋の形よ好く似たる屋島を望み、高松と丸龜の間よて、崇德帝を葬

うたる白峯を過くるなり。是皆此州すべて名なる所あり。又多度津の南なる象頭山は、金刀比羅の社なり。世は金比羅と稱へ、其靈異を説くこと甚盛ふして、賽客四方より集る者、幾萬あるを知らず。汝此地は至らむ、其社の壯麗なること、我邦は比無く、旅店の宏壯なるなど、亦我邦は比無きを見ん。

伊豫の東部の平野より、道後の地方は出づるは、櫻三里の峠なり。道後の温泉は、古より名高き所なして、松山は、此地方の主要なる名邑なり。是より宇和の地方は入るべ、地面の形勢一變して、山深く、谷幽は、道路も山坂登り降りて、嶮岨の處多し。宇和島は、此地方の名邑なり。

土佐は入るは、何れの路よりを可きや、余輩は甚其方向は迷ふなり。此州の道路は、何れよりするも、嶮岨なるなるざるは無く。川江路よりするれば、腹庖刀の嶮なり。是其路急嶮はして、腰は横たへたる刀、即土州人の謂ふ所の庖刀を、腹は抱ふるは非ざれば、登り難しといふとなるより、此名を生じたるなり。然れども今は風俗華まりて、刀を横ふる人なければ、腹庖刀の名も相應しからず。更は又阿波の海濱よりするべ、路唯は迂遠きのみなるを、土人の所謂飛石跳石の名虚なるべしして、路は巖石多く。加ふるは、通路の間の小川は、概徒

歩して渡らざる可からざるべし。旅人の困難尤甚し。然れども余い、他日天然の通路ある吉野川に沿ひて、大路を修め築こべ、行旅運輸の為に、大なる便利なる可きを知るなり。」高知い、此州の中程に殆き海濱に在り、繁華の大邑なり。此州の濱浦い、大なる彎形をなせるを以て、風景絶佳し。

第十五章 日本志の續

西海道

西海道い、元来九州と、其北の海に在る二島を併せたる一大區なり。九州ハ筑前、筑後、豊前、豊後、肥前、肥後、日向、大隅、薩摩の九つの州あるを因りて、此名なり。二島い、壹岐と對馬の二つの州にして、全道十一の州ありしが。近来琉球の一國、我邦の版圖に入り、西海道に、更に一州を加へたり。

九州い、古より又筑紫の稱なり。海岸い、出入甚しく。西の海岸にい、彼杵の入江、筑紫潟深く入り込みて、長崎の半島を成し。開聞崎、佐多岬、遠く南岸に突き出で、鹿兒島の内海を擁き。東の海岸にハ、國東の頭なり。海上にい、平戸、五島、天草、種子屋久など稱ふる數多の島々散布せり。

九州の北部にてい、山嶺東より西に脈を連ね。東に赴く者い、國東頭とあり。西に亙る者い、肥前を横截り、西

の海に迫りて、多良岳くあり、島原に秀てゝ、温泉岳と
ある。中間ふい、英彦山といふ高峯なり。此處より一つ
の横嶺を出して、北に亘きり。故に豐前及筑前い、州の
界に山嶺を繞らし、海濱と沿河の地に、稍平野なるの
み。肥前い、嶺の南に、廣大の平野ありて、筑後に彌り筑
後川此間を流る。其平野の廣きと、河の大なるとい、九
州に於て、未だ比ぶ可きものなし。
中央にて、山脈南より北に連り、左右に數多の横嶺
を出し、山峻しく、谷深く、阿蘇山、祖母山、國見岳等の高
峯なり。横嶺い、豐後の南境に亘きる者及肥後の南境
に亘きる者最大なり。而して此中央の山脈い、豐後に

聳えたる由布岳の山頸ふて、北部の山嶺に連あり。故
に河の大なる者、皆源を中央山脈の間より發し、東と
西とに向ひて流る。肥後の球摩川豐後の大野川日向
の五箇瀬川大淀川い、其尤名ある者なり。山河の形勢
斯の如くなるに由りて、豐後い、地勢自東西の二部に
分れ、大野川の谷尤平野多し。肥後日向い、其界に近づ
くに隨ひて、山深く、海の濱、及河の傍に稍平野なるを
見る。若又此二州を較ぶる時い、肥後に平野多く、日
向ふい山地多しとあり。
日向の霧島山い、名高き噴火山ふして、東西二つの峯
高く聳え眺望に富み、奇勝多し。是より山脈二つに岐

を。一ハ大隅の中央ニ亙リテ、高隈岳の高峯とおし。一ハ、薩摩ニ蔓きども、別ニ甚高き峯ふし。唯南の端ニ、開聞岳といふ孤峯ありて、世ニ知らるたり。故ふ此二州ハ、何處も山嶺ふ〳〵ざるハ無く、唯薩摩の川内川の邊ニ、狹くして長き平野あるのみ。

鹿兒島内海の中なる櫻島ニハ、御岳とりふ高峯ありて、其名亦世ニ聞えたり。此山ハ噴火山ふして、山の頂ふハ烟絶えず、山下ニハ温泉の涌き出づるたり。

壹岐ハ、一の小島ふして、其地理汝ニ語るニ足らず。對馬ハ、島の形南より北ニ長く、中間ニ一の入江たり、船艦を泊するニ堪へたり。全島山多く、地味瘠せて、耕作ふ宜しからず。

九州の氣候、豐前、筑前、及肥前の北部ハ、南ニ山を負ひ、北の方海ニ向ふニ因りて、頗寒し。肥前の南部より、肥後ニ入り、豐後より日向ニ入るふ隨ひて、漸暖ふして、冬も寒暖計四十度ニ昇降するニ過ぎず。大隅薩摩ニ至ればハ、漸熱く、二月の半、北地積雪家を埋むの時ハ、恰此地櫻花盛ニ開くの候たり。各州山嶺多しと雖、平野ハ地味肥えて、産物多し。而して其を比較する時ハ、筑前、筑後、肥前ハ上等ニ位し。豐前、豐後、肥後ハ中等ニして。日向大隅、薩摩ハ下等ある可し。但薩摩の農夫ハ、卑矮の茅屋ニ住ミ、貧寒の狀を現ぜずとも、士族ハ稍

富裕の色あり。日向及薩摩の貧民は、甘薯を常食とふなり。

産物は、礦物は肥前筑前の石炭なり。中にも肥前の高島の坑、世に名あり。各州山野の間櫨を植ゑ、両筑肥前及薩摩より盛に蠟を出す。日向の赤松、肥後の米、肥前、薩摩、大隅の國府の煙草も世に名あり。筑前の博多織、豐前の小倉織、筑後久留米の木綿綿、肥前の有田、伊萬里、及薩摩の陶器、薩摩の七島、豐後其他より産する七島席は、製造品の、絶きて佳きものあり。中にも有田の陶器は、精巧を極め、外國輸出品中の貴重なるものとなん。又大隅、薩摩は、熱帯の果物を産し。豐後、日向、肥前、壹岐、對馬の海は、漁獵の利多く、肥前の鯨獵、殊に盛ふなり。而して薩摩の砂糖、薩摩綿、薩摩上布の名を得たる物品は、曾て琉球より薩摩に輸して、四方に販ぎしものゝみ。

余は既に西海道の天然の形勢、及産物の事を說き了りたれば、例に依りて、其旅行の談話を始めんとなん。中國より、早鞆の瀨戸を渡りて、豐前に入れば、小倉といふ名邑なり。是九州の東街道と、西街道と相岐る所あり。東街道よりすれば、中津といふ名邑を過ぎ、名高き宇佐八幡に至り、遂に豐後に入る。西街道よりすれば、直に筑前に出で、黑崎といふ處より内地に入り、寒

水峠の嶮路を越え、山家ふて、長崎街道と相岐る。
筑前より、尚汝と語る可き處多し。即海濱より、博多の港、
福岡の邑なり、市街相連りて、繁華の都會をなす。博多
の北より、海の中道、箱崎等なりて、風景絶佳し。巽の方
五里より、宰府なり。世より名高き所ふして、大宰府の址、菅
原道真を祀りたる天滿宮等なり。此州は、古九州の要
地ふして、此地より於て起りたる事蹟多し。汝此地を旅
せば、余が今汝と語りたる處の外、更より多くの名所、古
跡を見るべし。

長崎街道は、山家より肥前より出で、佐賀より至る、是此州
の屈指の大邑なり。西部より至るべ、丘陵浪の如くより連
りて、路より凹凸多し。諫早の地頸を過ぎて、長崎より近き
所より至るべ、日見峠なり、路頗嶮し。長崎（大里より路六十里）より至
るべ、深く入り込みたる入江の岸より、建て設けたる市
街、甚賑はしく、港より、數多の船舶湊ひ集まり、港を繞
きる山の腰ふ、秀麗ふる樓閣なりて、風景も亦極め
て佳きを見る。此港は、外國貿易場の最古き者より、
最世より名なり。外國貿易場の事は、余前ふ屢汝と語る
り、汝能く其何事を為たるを了解せしや。外國貿
易とは、即内國商人と、外國商人と、物貨を賣買する
とふて、汝が知る所の羅紗、金巾、唐物類は、皆外國商人、
我邦の貿易場より携へ来り内國商人これを買ひ取り

て、汝の需用に供する者あり。然れども汝猥に汝の金錢を以て、外商の物品に貿ふることなく、汝の物品を以て、外商の金錢に易ふることを旨とふべし。是汝の家を富まし、汝の國を盛にする可き緊要の事あり。

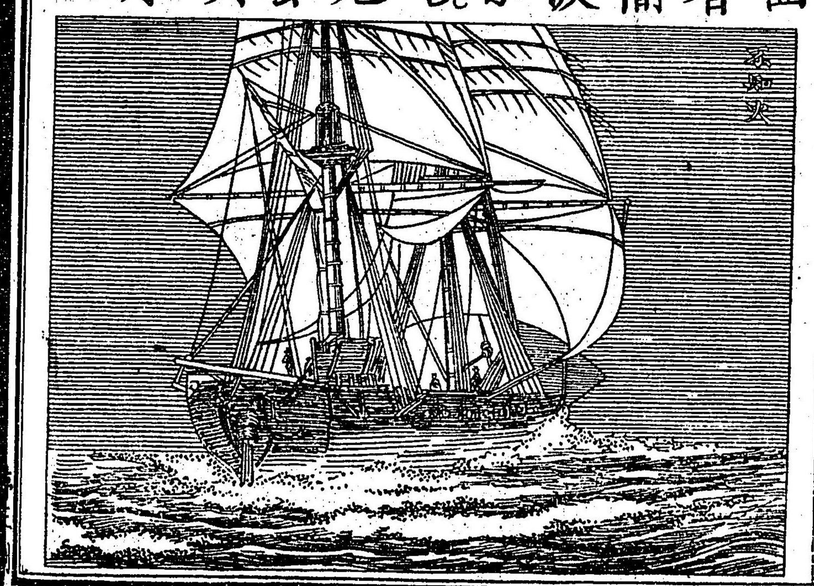
肥前は州大ふして、名ある所尚多けれども、余が此簡短なる地理學の談話に於ては、一々これを汝に語る可き暇なし。

九州の西街道は、山家より、直に筑後に入る。汝筑後川を渡らば、一の長き嶺、河の南の平野を限りて、其狀屏風の如くなるを見ん是即世に謂ふ屏風山なり。此州に久留米、柳河の二つの名邑なれども、西街道はこれを經過せざる可し。

肥後の北境は、路概丘陵の間なり。白川の北岸に至らば、汝は熊本に入る。一都會なるを見ん。熊本城は、加藤清正の築く所にして、壯固匹ふく。明治十年西郷黨の攻圍を以て名あり。市街此時兵燹に罹りたれども、今殆舊觀に復せり。熊本近傍は、肥後の最廣坦なる地方にして、稻田七八里に彌る。汝此間を旅する時、東に阿蘇山あり、西に海を隔てゝ温泉岳あり、二峯共に烟を吐きて、風景頗奇なるを見ん。

宇土より南は、内海の濱に沿ひて行く。八代は、沿道の名ある邑なり。此内海に入り、汝に語る可き一奇事あり。

即不知火とて、火の海面を燒くが如く見ゆる者是なり。此火は、初秋の闇夜に、最鮮やかに見え、其波間に閃く光彩は、美麗かるべし。蒼天の星の如し。是所謂燐光にして、其光は、汝の陸地にて見る螢の如き、一種の小動物の、海面に羣がりて、發つ所なり。



汝肥後の南境に至らば、崎嶇たる三つの峠を過ぐるあり、是所謂三太郎峠なり。薩摩に入りて、外洋の岸に出でゝ阿久根といふ名邑に達らん。是より前、二十餘里の間は、川内川の邊を除くの外、路概崎嶇たり。然きども、又天然に甚嶮しき處あり。故に薩摩の中央に亙まる山脈を越ゆる路の如きも、一高丘の間を過ぐるを覺ゆるのみ。

内海の濱に出づれば、鹿兒島といふ名邑なり。豐前の大里より、此處まで路程百里に餘る。此地は、元薩州侯の居城にして、人口多き都會なりしが、西郷の亂に、兵燹に罹り、大に衰へたり。又此地は、文久三年十七年前薩州

矢ぶ、英吉利の軍艦と、戰を交へし所あり。

鹿兒島より大隅、日向、豐後を經て、豐前に出づる路を、余輩い、九州の東街道と稱ふ。鹿兒島より、大隅の國府とりゝ名邑を過ぎ、福山に至るまで、通路内海の濱ふ在り。沒此間を旅する時、櫻島の鬱蒼たる樹林に掩ひ、御岳の頂より烟を吐きて、風光尤美なるを望むふらん。是九州にて名高き好風景の地なり。

東街道い、福山より内地に入り、日向の都城を過ぎ、宮崎に出づるを順路とする。路山坂多けれども、甚嶮しき處ふし。宮崎い、神武帝の初の都あれば、今に帝を祀る社あり。日向第一の繁華の地なり。宮崎より北に、路海濱に沿ひ、著しきさ山坂ふし。沿道に高鍋、延岡等の邑ありども、皆小なり。延岡の傍を流るゝ五箇瀨川の上流にい、神代の帝都と稱ふる高千穗、天岩戸等なり。名所、古跡頗多し。

豐後の界に至らべ、汝い是まで曾て經過せざりし程の難路にかゝるあらん。是即赤松谷の山路ふして、牛馬通ぜぬ。然るふ前途五六里の間も、尚山路嶮隘にして、旅客の困難實に少からぬ。

大野川の谷に出づるべ、路平坦あり。海濱に出づるべ、大分町なり、沿道の繁華ある邑なり。東街道い、是より著名の難所ある金越を越え、豐前に入る。其宇佐、中津

を經て、小倉にて、西街道に合ふことゝ、汝の胸中暗に悟るあらん。

余ハ是まで、九州沿海の、旅行の景況を、語り盡したれども、未内地の旅況に、及ばず。九州ハ、筑後川、及大淀川の谷の通路の外ハ、地僻に、路嶮しく、旅行極めて難し。余曾て熊本より東に入り、馬見原を越えて、日向に出で、高千穂近傍の名所を探らし時、行き暮れて、山村に宿りしが、其家ハ、村中の大家と見えしのども、一粒の米、一椀の野菜もなく、食膳ハ、唯穀のまゝ、粉にした蕎麥に、湯を入れて煉りたるものと、黒色の味噌のみあるのみ。其寒僻のさま、想ひ知る可きあり。

二島ハ地僻ふして、汝に語る可き程の都會もなく、又名所もなし。唯對馬の嚴原ハ、九州より渡る者の上陸する所、鰐浦ハ、朝鮮へ渡る者の發航する所なれば、汝に此を記臆せ可し。

琉球　余が九州、二島の談話を、茲に畢り、恰汝に琉球の地理を語る可き時を得たり。琉球羣島ハ、九州の西南二百七十里の間に散布し。路遠く、海荒く、交通固より容易かゝらざれども、其海常に必荒るゝ事なく、風靜に波穩なるの日ハ、琉球の人能く小舟を以て、九州に至り、貿易をなすなり。

琉球ハ、大島、沖縄島、先島の三群に分る。大島の一羣ハ、

最九州に近く、其顯れたる者、大島を首とし、喜界、加計呂麻、徳島、永良部の數島なり。沖繩島の一群は、中部に位し、沖繩島は、其首島にして、惠平屋、慶良間、久米の數島はこれに屬す。先島は、最遠き一群にして、宮古、石垣、入表、與那國の數島なり。與那國島は、支那の南の臺灣といふ島を距ること、凡二十八里あり。

琉球群島は、其位置遠く相隔り、風土間同じからざる者あれども。概してこれを論ずる時は、何れの島も、山谿崎嶇として、平地少ふく。人民概海に沿ひたる、褊小の平野を求めて、これに居る。然れども其地甚肥えたるにあらず。氣候は暖ふして、冬も冰雪なく、木葉落ちず、菊花未萎まざるに、梅花既に開くを見る。各地芭蕉、蘇鐵、椶櫚、椰子、阿咀呪の類榮え茂りて、景色自中土に異あり。

琉球は、夏秋の交、大風屢起り、急雨に加りて、禾を倒し、木を拔くの患あり。故に耕作を為すに、秋耕し、冬種まき、春耘り、夏收むるを常とし、家を造るにも、棟を低くし、樓を起さず。

琉球は、米、麥等の産少ふく、土人は、概甘藷を常食とし。甘藷熟せざる時は、蘇鐵を食ふ。汝此地に至らば、乃甘藷野を蔽ひ、蘇鐵立を纏ひ、又琉球人の食料とする所の芭蕉、村を繞るを見ん。其他落花生、砂糖、藍、細上布、

芭蕉布、泡盛酒、畳表等の産物なり。

琉球は、元中山王の領せる所ふして、日本と支那とに兩屬せし國なれど、其風俗兩國と雜ふまじきを委しく言へば、支那よりも、寧日本に類し、言語の如きは、全く日本語の稍訛りたるものを用ふるなり。沖縄島の首里は、元中山王の居城ふして、琉球の最繁華なる所なり。首里の西に近き那覇は、琉球の最名高き港にして、港に近く、又久米泊といふ二つの名邑なり。是琉球地理の概略なり。

第十六章日本志の續

北海道

蝦夷島は、汝の地圖にて見るが如く、中土と津輕の海峽を隔て、其海峽は、潮流甚駛きを以て、中土の人、此島に渡る者自寡なく、近來まで、蝦夷と稱ふる土人の窠窟ふして、土地開けざりしが、我政府の開拓に力を盡くすと、其富の大なるとに因りて、中土より移り住む者、漸多くなりたれば、余は汝の為に、其地理を語らんとある可きなり。此島今は分ちて、渡島、後志、石狩、天鹽、

北見膳振、日高、十勝、釧路、根室の十州とあし。其東北の方の群島を、千島の一州とあし。總てこれを北海道と稱ふるあり。

蝦夷島は、殆稜形を成せるよ由り、宗谷、知床、納沙布、襟裳等の著しき岬あり。然をども其海岸は、出入少ふく、噴火灣の外は、著しき海灣なることふし。

蝦夷の地勢は、口蝦夷、奥蝦夷の二つの區別を以ては、を論ぎるを宜とす。口蝦夷、奥蝦夷の稱は、元来襟裳崎よ亙をる山脈を以て、東南海濱の地方を、兩つよ分ちたる稱あれども。其山脈は、尚遠く北よ亙りて、石狩天鹽の界を分ち。其東と西とを以て、著しく地質、氣候を異ふし、恰天然の限界を顯はすを見をべ。余は此山脈を以て、蝦夷を兩分するふとの、極めて適當なるを信ぎるなり。

口蝦夷、奥蝦夷の界を限をる山嶺は、脈厚く、峯高く、中央よ秀でゝ、石狩岳、十勝岳となる。此邊は、蝦夷第一の高地ふして、數條の大川を出を。

口蝦夷は、此大嶺の西よして、數多の横嶺西よ向ひて支を出で、河流も皆西よ向ふ。横嶺は、石狩の南境よ亙をる者最大ふして、タ張岳といふ高山なり。石狩、天鹽、の海濱よ亙をる者も、亦脈厚くして、數多の高峯併び列ある。河は、石狩川最大ふして、無數の溪流を合せ、百

六十餘里の間を流れを通り、石狩邑より海に注ぐ。河の兩際は、地勢大に闊け、其平野直に膽振、日高に彌る。此間に、渺茫際を見ざるの草野、蓊鬱晝尚闇きの森林相連る。恰百萬の人民を生活せしむ可き沃野ふきぐも。人の去るを開拓せる者少ふきは恰寶を捨てゝ、顧ざるごゝ如し。汝聞くべし、昔の荒き果てたる武藏野ふ、今は方六尺の地、二三十圓に價する繁華の東京を出せるかとを。

口蝦夷の西南部は、半島の形をふし。山嶺其中央に亙りて、大略後志と膽振の界を限り、渡島に至りて兩岐ふ分る。脈中に後方羊蹄、札幌等の高山ゐり。中ふも後方羊蹄山は、蝦夷第一の高峯と稱ふ。此地方は、地形狹きに由りて、大河ふ。唯後志川は、其流稍長く、蝦夷五大河の一に數へらるゝ雖、其實は名の如く大ふ。

奥蝦夷には、口蝦夷界の大嶺と平行せる、一帶の嶺あり。十勝と釧路の間より、天鹽と北見の界に亙り。中央に殆き所ふて、天鹽岳の一高峯をふし。十勝岳の山頸ふて、二嶺相連る。此二嶺の間は、即天鹽、十勝二大河の、狹くして長き谷にして、地味肥えたり。然ふ又釧路北見の間より、東に向ひて、目梨の山嘴に亙まる長き嶺ゐり、雄阿寒岳、雌阿寒岳、目梨岳等此間に聳えたり。嶺の南ある釧路及根室ふも、阿寒、釧路の二つの湖

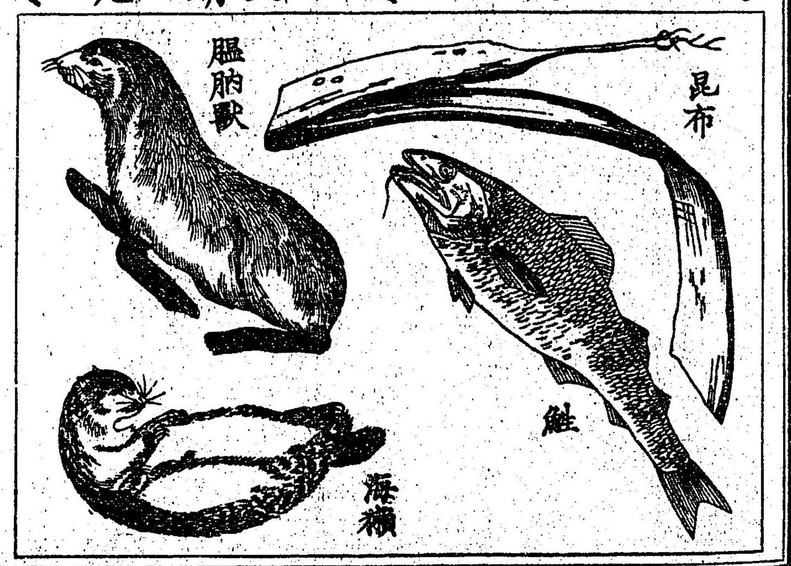
の下流ある久摩川、及西別川等の大河なり。地勢開濶の原野をおせども、地味佳ならず。

蝦夷は、氣候甚寒く、冬は寒暖計時より零度より下るまとなり。酒の如きも、樽の中ふて凍る。平地も、雪積もること五六尺より及び。河水氷を結びて、人馬直より踏みて渡る可く。海水も亦凍り、船を行る可からず。渡島、膽振、日高は、南部より在りて、較温暖なれども、雖中土の如き暑氣は、決してなることなし。

蝦夷の産物は、皆天産物ふして、製造品を甚寡ふし。水産は鮭鱒、大口魚、青魚、鰯、海扇、昆布、及腽肭獸、海豹、海獺、鯨等の海獸の類を産を。但し東海岸は昆布、大口魚多く。西海岸は鮭、青魚多しとあり。鮭は、鹽引、臘乾、或は鑵詰より製して、四方より輸出をること甚盛なり。

礦物は、世人の想像せしが如く豐ふ〳〵ず。然れども石炭と鐵は、其量極めて多く、其質極めて良し。

石狩の幌内、空知川の邊、後志の茅の澗の石炭坑の如きは、蝦夷の金庫と



稱ふる所あり。其他椴、檜、樺、落葉松等の良材、熊、鹿等の野獸、鷹、鷲等の鷙鳥多し。穀物も當時産出少かけれども、石狩、膽振、日高、十勝等の野い他日農業盛大の地とふべんたいと知る可きあり。

蝦夷島の土人、即蝦夷い、風俗余輩と異なれど、汝の為め、其大略を語らんとなる可こうず。蝦夷い身體毛深く、髪を被う。女い口傍、手臂に黥し。獸の皮、或い木の皮ふて製うたる粗服を著け。獸肉、或い魚肉を食し。農業を知らず。陋穢の茅屋に住む。言語も余輩と異ありて、山をノボリと云ひ、川をベッと云ふなど、一種の方言ありう。然れども近来中土の人、移り住む者多くありて

より、其風俗次第に華まり、復昔時の如くあらず。

蝦夷島い、斯の如き野民の住居する所なるに由り、嘗て蝦夷の建てたる、一つの都會あり、又驛路もあるうしが。近来政府より開拓使を遣り、開拓に力を盡くすに依りて、其景況漸華まりたれども。其旅況、固より他の諸道の如くあらず。街道い、罕に見る所の寥しき村落中に、會所と稱ふる者を設け、纔に旅人を宿し、運輸の事を辨ずるのみ。又旅人の乗る可き車、或い駕籠も無く。小川に橋梁の設け無ければ。旅人多くい馬を儲ひて、水を渉り、山を越ゆ。然れども河の大なる者い、刳舟に乗りて、渡らざるを得ず。蝦夷地の馬い、形小さけ

きども、山坂を馳驅するもと甚健あり。

余輩中土より蝦夷に渡るに、渡島の箱館に上陸せるを常とす。此港に、外國人と貿易を為す所あれど、商業の盛ふして、市街の賑しきもと蝦夷第一たり。然るに往時は、旅人多くは、渡島の西南の端なる松前に上陸し。且其地は、元松前藩の城下たりしに由り、今尚繁華の邑をなせり。

札幌街道は、箱館より北に向ひて、内地に入る。内浦岳の火山を右傍に望みて、再噴火灣の濱に出で、森の港に至る。是より海に浮びて、膳振ふて名高き室蘭港に渡る。此海、今も漁船を以て往来を通ぜず。室蘭より前

は、海濱に沿ひて、苫小牧に至る。是より江別の谷を經て、石狩の札幌に至る。路程五十七里餘。札幌は、近来林莽を拓きて、建て設けたる一邑なれども、其地勢蝦夷の要衝に當るを、開拓使廳の在る所なるを由りて、人口俄に増し、市街漸盛なるに至れり。

蝦夷の東街道は、苫小牧より、尚海濱に沿ひて進む。勇拂、及日高の沙流、靜内、浦川、幌泉等の名邑を過ぎ。是より猿留越の嶮しき峠を越えて、十勝に入る。十勝にも、別に汝に語る可き程の邑閭ふし。釧路に至るべ、厚岸とりつ良港なり、室蘭と其名を均しくせ。港内に五つの小島なり、牡蠣おもに著きて、雪の如し。土人採りて

食料とする。根室の東南の山嘴より至るべ、根室港なり。是蝦夷の東の端なる港ふして、千島より渡る者、皆此地よりす。且此地は、鮭鱒の好漁場たるを以て、人口多く、市街頗整ひたり。

西街道は、松前より札幌より至るの間、村邑多くして、世より荒寥の境と稱する蝦夷地とは覺えず。中にも、江刺、熊石、岩内、小樽等頗盛にして、岩内より、名高き茅の澗の石炭坑なり。然るに、岩内の南より、雷電峠なり、北より、余市越の山路なり、西街道の難所ふして、旅人の艱實に少ふなり。又西街道も、石狩より天鹽に越ゆる所ふ、小布伊越なり。是より蝦夷島の北の端ある宗谷港に至るまで、嶮岨の處尚多し。今汝に語るが如く、蝦夷地の旅行は、路の嶮しきに困し、宿驛の陋しきに困し、食料の乏しきに困み、中土の旅行と同日の論にあらざるべ。柔弱に身を持ちたる書生輩は、一日も其旅行をふし能はざるべきを憐むなり。

日本志中旅況を記する僅に國道の一斑に止まるべ學生の住所に近き地方の旅況等は教師特ふこれを口授せんことを望む

千島の群島は、國後擇捉得撫新知幌筵占守最名なり。地勢山岳多く、地味亦瘠せて、産物少ふし。且此群島も、概夏は烟霧深く、秋も風波荒く、冬は海氷冰り、春は冰塊浮び流れて、極めて寒僻の境なり。然れども其鳥獸魚類の産は甚饒なり。

第十七章日本志の結尾

余ハ是まで、日本の東の端ある千島より、西の端ある琉球までの、地理と説き盡したきで、汝ハ余が日本志の談ハ、既に畢ると想ふあらん。然きども、他に尚種々緊要の事の、汝に語る可きなり。汝暫勉めて、更に余が説き出を所の事を聽け。

抑我日本ハ、九州の長崎より、蝦夷の札幌までの、國道を旅する時も、路程の遠きこと、六百里に餘り。又假ふ蝦夷、中土、四國、九州の海岸を廻りて、旅する者と考ふる時も、其路の遠きこと、三千八百五十餘里にして、世界の直徑よりも長し。汝如何して、此地より彼地に旅行し、或ハ物貨を輸り、或ハ音信を通ぜんと欲するや。

是に於て、余ハ汝の為に、簡略に郵便、電信、航海社中の事を語ることの、極めて緊要なるを知るなり。

我邦の都會、名邑ハ、云ふまでもなく、僻遠の村落も、郵便の通ぜざる所なきに。汝僅の錢を費して、切手を買ふ、別に脚夫を雇ふとも、容易く書狀を送ることを得可し。又電信線ハ、九州の端より、蝦夷の札幌まで、此處彼處に架け設けたきを。東西遠く相隔りたる所も、尚瞬間に音信を聞くことを得可し。

航海社中亦盛に興る。沿海の名ある港ハ、殆船路の通ぜざる無し。中ふも、三菱社中の氣船ハ、航路最廣くして、支那の上海に及ぶ。故に旅行、運輸の便あるのみとも、

實よ汝の思慮の外ふ〜て、横濱より陸路百四十五里を隔てたる神戸も、二日ゐ〜ぐ〜て、六里よ達るもと〜を得可し。余曾て此間の海を航せしが、武藏の内海を出でたるも、日の暮る〜頃ゐ〜しも、朝よい志摩の沖よかゝ〜ら、其夜の未明ゆけざるふ、神戸よ著せり。其便利ゐるもと〜想ふ可し。是よ由りて、今い航海者の為よ、處處の岬、或い島よ、燈臺を設けたり。是夜中よ海を航せる者の、船路の方向を定むるふ、必要のものとゐる。余ぶ地圖上よ、燈の光の如き＊の符を記せる處い、即主眼ある燈臺の在る所なり。

次よ汝ふ語る可きい、府廳、縣廳の事ゐり。元来東京よい、我日本の大政府ゐるとも、直よ遠隔の地方を管理ゐるよ、便宜〜〜ぞきべ、更よ處處よ府廳、縣廳を置き、大政府の指圖を承けて、政令を施行せしむ。是余輩と大ゐる關係ゐきべ、余い汝の為よ、其名稱と位置とを示さんとす。

府三

名稱	位置	名稱	位置	名稱	位置
東京府	武藏東京	京都府	山城京都	大坂府	攝津大坂

縣三十六

名稱	位置	名稱	位置	名稱	位置
兵庫縣	攝津兵庫	堺縣	和泉堺		
神奈川縣	武藏横濱	埼玉縣	武藏浦和	千葉縣	下總千葉
茨城縣	常陸水戸	山梨縣	甲斐甲府	靜岡縣	駿河靜岡

道		
東山道	滋賀縣	近江大津
	群馬縣	上野前橋
	宮城縣	陸前仙臺
	山形縣	羽前山形
北陸道	石川縣	加賀金澤
山陰道	島根縣	出雲松江
山陽道	岡山縣	備前岡山
南海道	和歌山縣	紀伊和歌山
西海道	福岡縣	筑前福岡
	熊本縣	肥後熊本
	愛知縣	尾張名古屋
	三重縣	伊勢安濃津
	岐阜縣	美濃岐阜
	長野縣	信濃長野
	櫟木縣	下野櫟木
	福島縣	岩代福島
	岩手縣	陸中盛岡
	青森縣	陸奥青森
	秋田縣	羽後秋田
	新潟縣	越後新潟
	廣島縣	安藝廣島
	山口縣	周防山口
	愛媛縣	伊豫松山
	高知縣	土佐高知
	大分縣	豐後大分
	長崎縣	肥前長崎
	鹿兒島縣	薩摩鹿兒島
	沖繩縣	沖繩島首里

今日本志と終ふるに臨みて、更に汝に告ぐ可きあり。前に説けるが如く、日本は既に畿内と八道に分ち、尚おきて八十五分せる者を、州とふ。されど、州或は州を甚小さき地方ありと思ふべし。然るに、州によりては、廣さ數十里ふ彌まる者あり、數十萬の人民ありふ住ふ、其内には、更に郡と稱ふる小別あり。汝の住所は、其郡の一小隅たるふ過ぎず。而して、余が此日本志は、固より地理の大略ふれど、汝の住所の如きは、おきて語るふ及ばず。且余が汝ふ示せる地圖も、極めて小配法ふれば、汝の住所を記せる餘地ふらざりしあり。因りて今試に問ふ、汝の住所は、何道に屬し、

*學校の慣習ふるうて其地方の地理を教へんと欲する者宜しく此處に於て求べし

何の州の、何の方に在るや。汝若汝の住む所の州、及郡、郷の地理を知らんと欲せば、余又別に汝を語らん。*

新撰地理小志巻二畢

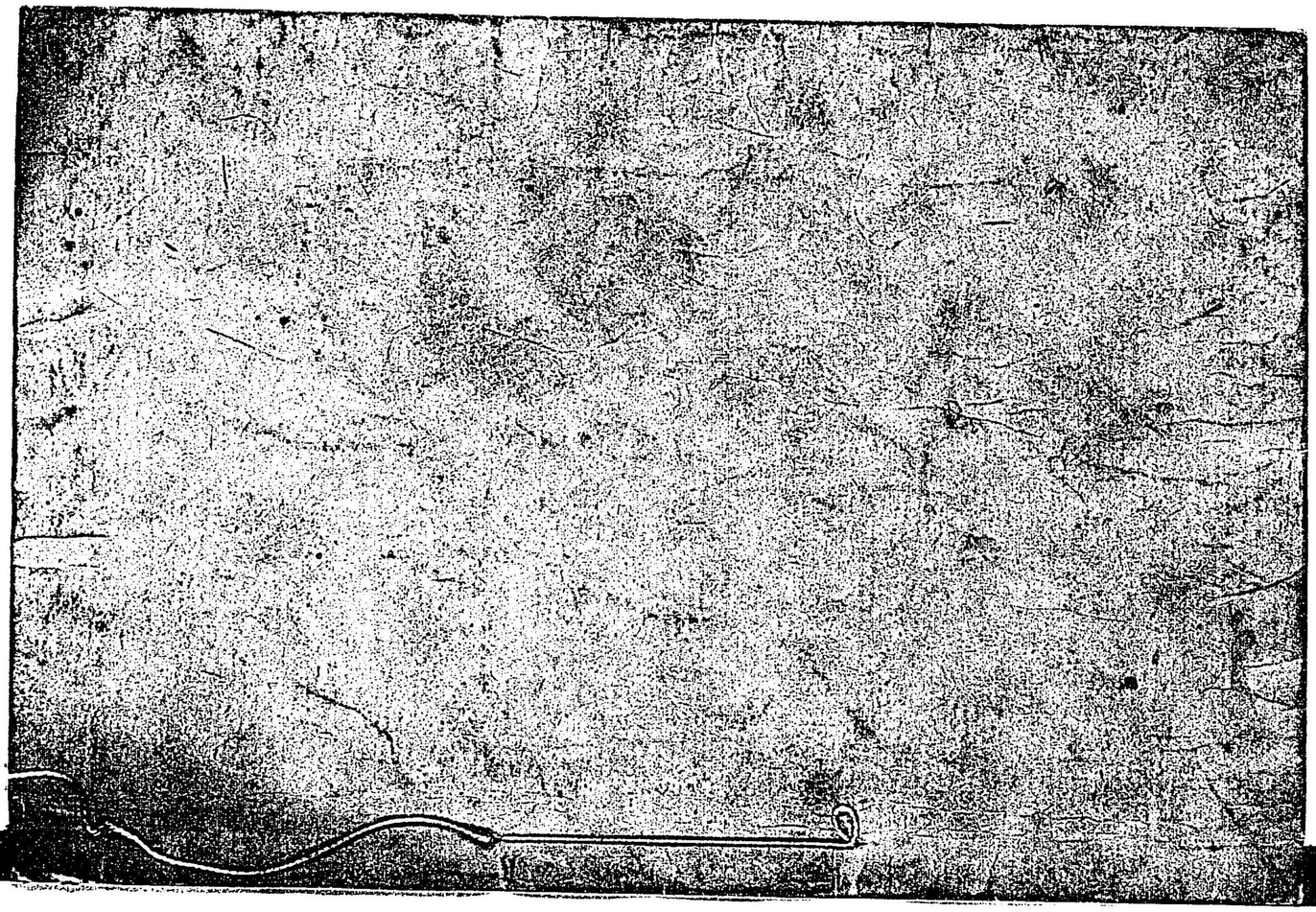
地名及人名讀例　但平易訓を待たざる者省きて載せず

茅渟　朝熊山　矢作川　愛鷹山　石廊崎　鹿野山
熱海　宇都谷峠　日坂　桶挾間　間遠渡　國府臺
竹生島　斗南　安達太郎山　早池峯　六角牛山
半田　尾去澤　俵藤太　垂井　細久手　入田澤
野蒜　馬門　湯入　板谷峠　木芽嶺　彌彦山　小
千谷　外面　親不知　春日山　米山越　新發田
鼠關
夜見濱　冰山　素戔嗚尊　宍道湖　十六島　河守
上尾峠　東郷湖　船上山　米子　安來　小豆島
三次川　滑山　伊部　市杵島姫　合衆國　佛蘭西

蹉跎崎　粉河寺　金刀比羅　腹庖刀　彼杵　國東
頭　多良岳　山家　諫早　英吉利　大分　金越
馬見原　嚴原　加計呂麻　永良部　惠平屋　慶良
間　入表　與那國　首里　知床崎　室蘭　納沙布崎　襟
裳崎　噴火灣　後方羊蹄山　苫小牧　勇拂
沙流　靜内　猿留越　厚岸　茅の澗　小布伊越
國後　擇捉　得撫　新知　幌莚　占守　上海

帝國館藏版

明治十二年三月一日版權免許
仝　十五年七月廿一日再版御届
仝　十七年七月十八日三版御届

編者　山形縣士族　山田行元
東京小石川區小日向臺町一丁目十九番地寄留

出版人　山形縣士族　山田仙
東京小石川區小日向臺町一丁目十九番地寄留